フェトレアス物語～狼－Low－～

稲本　楓希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フェトレアス物語～狼－Ｌｏｗ－～

【Ｎコード】
Ｎ７２９１Ｙ

【作者名】
稲本　楓希

【あらすじ】
ユースナ暦９２５年、場所はゼンロ大陸の遥か南にある島国「パレセリア」。
アグノスの街の東に広がる「ソゲンの丘」。そこに建つ教会に住む十五歳の少年・フィルは、リオやトトといった友達に囲まれて平和に暮らしていた。しかし、その頃街には、近くの森に出没するオオカミの姿をした凶暴な妖魔「ロウ」に関する噂が流れていた。

第一章　教会の少年

真っ暗な夜、空には星はなく、ただ満月だけが孤独に浮かんでいる。その月明かりに照らされて、森には奇妙な静寂が漂っていた。普段なら聞こえるはずの虫の声、木々のざわめき、梟の鳴き声、そういったすべての音という音が、その森からは消えていた。まるで、森全体が何かの危険を感知して、息を潜めて身構えているかのようだった。

しかし突然、その静寂が破られた。何かの動物が暴れるかのようなせわしない音が、断続的に森に響いた。木々の間からこぼれる薄暗い月明かりの小さな塊が、あちらこちらに暴れながら移動する、その音の主をちらちらと映し出したが、それが一体何であるかが分かるほどに照らし出すことはなかった。やがてその動物がのたうつような音は斜面のある方に移動して行き、突然転げ落ちるような音に変わった。その音に合わせるように、転げるそれを月明かりが照らした。

やがてその動物は森から転げ出て、遂にその全貌が月光の元にさらけ出された。

それは、一匹の動物ではなかった。二匹の動物が、縺れ合って互いにつかみ掛かっていたのだった。斜面を転げた勢いで地面にぶつかった衝撃で、縺れ合っていた二匹の動物は引き離された。するとそれらはすぐに体勢を立て直し、互いに睨み合った。

その片方は、鈍く輝く太くて長い体を持った、体長五メートルはあるかという巨大な蛇だった。その二つの目は狂暴な怒りに赤くギラギラと燃えて、もう一匹の動物を睨みつけている。

そしてもう一匹の動物は、その大蛇の半分くらいの大きさの狼だった。体の大きさでは大蛇に劣るが、毛を逆立たせ、銀色の牙と爪を剥き出しにするその迫力は、赤い眼の蛇に対してもまったく退けを取っていなかった。ただ、大蛇と大きく違うのは、その眼に怒り

を湛えていないという点だった。
その二匹の動物は、互いに唸って威嚇し合いながら、一定の距離を保って睨み合っていた。どちらも相手の一瞬の隙を逃すまいと眼を光らせながら、物音一つ立てずに少しずつゆっくりと移動して行く。
永遠とも思えるようなその緊張した時間の後、今にも切れそうになっている張り詰めた糸のような狼と蛇の間の空気が、ほんの少し揺らぐ瞬間があった。そして狼も蛇も、その揺らぎを見逃さなかった。
次の瞬間、二匹の動物は、再び縺れ合い、暴れ回っていた。大蛇が鋭い牙がズラリと並んだ顎を大きく開き、狼の首筋に噛み付こうとした。が、狼の方が一瞬早く、太過ぎる鞭のような大蛇の胴体に、月光を受けて銀色に輝く、鋭く長い爪を食い込ませた。
すると、奇妙な事が起こった。狼の爪が食い込んだ辺りから、大蛇の体が光を放ち始めたのだ。その光は次第に大蛇の体を包み込んで行き、そして真っ黒だった大蛇の体は次第に形を失い、ただの影になって、闇の中に消えていった。
そしてさっきまで確かにそこに存在した、今はもう跡形もない、黒い体と朱い瞳の大蛇の残像を見つめながら、生き残った狼はその場に座り込み、そして顔を上げて虚しい表情で天に孤独に浮かぶ満月を見上げていた。

暖かな陽射しが差し込む気持ちのよい朝、アグノスの街の南東に広がる黄緑色のソゲンの丘では、小鳥達は心なしかいつも以上にはりきって、明るい声で歌を口ずさんでいるようだった。また、その丘に建つアグノスの教会の部屋に窓越しに差し込む朝日の光も、どういうわけかいつもより明るい色合いに見えた。
しかし、そんな明るい鳥の声も陽の光も、その部屋で眠っている一人の少年の眼を醒まさせる事はできなかった。男にしては長めの、

寝相でボサボサになった灰色の髪を持った十五歳の少年は、その顔に光が当たっているのも構わずに眠り続けていた。
その時、部屋のドアを叩く音がした。しかしその音にも、少年は目を醒まさない。するとドアを開いて、一人の若い男性が部屋に入ってきた。部屋の床には、『本の要塞』とでも形容するのがピッタリだと思えるほどに本が散乱していて、足の踏み場もないほどだったが、この部屋を歩くことに慣れている男性は、いとも簡単にその本の隙間を縫って、少年が寝ているベッドにたどり着いた。
「ほら、起きなよ、フィル」
男性は親しみの篭った優しい声でそう言いながら、少年・フィルを揺すり起こした。
「今日はリオちゃんやトトくんと一緒に街に行く日だろ？」
男性がそう言うと、フィルは微かに眼を開けた。それから少しの間、寝ぼけて何がなんだか分からないような表情をしていたが、やっと男性の言っていたことの意味が分かったのか、ふいに目を開いた。
「…ソール叔父さん、今何時？」
フィルは寝転んだまま、いかにも眠たげな声で尋ねた。
「だいたい８時半ってところかな」
叔父さんが答える。
「…じゃあ、あと十分だけ…」
フィルはそう言って再び眠りに落ちようとする。
「こら、十分も寝てたら朝御飯食べる時間がなくなるじゃないか」
ソールは顔では苦笑しつつ、しかしどことなく有無を言わせぬ口調で言った。が、まだ眠たくてしょうがないフィルは五月蝿そうに窓側に寝返りを打つ。
「まったく、しょうがないなぁ」
ソールは頭の後ろを掻きながら言った。
「それじゃあ、今日のトイレ掃除はフィルに頼もうかな？」
「待って、今起きるから」

ソールの言葉に、フィルは即座に反応する。トイレ掃除は、フィルが教会でする仕事の中でも最も嫌いな物だった。普段はソールが嫌がりもせずに請け負ってくれるのだが、フィルが言うことを聞かない時にはここぞとばかりに脅しがわりに使うのだった。

「じゃ、下で朝御飯用意して待ってるからね」

フィルの反応に満足して、ソールはそう言い残して部屋を出て行った。残されたフィルは目を擦りながら、欠伸をしつつ起き上がった。そして大きく延びをして、大儀そうにベッドから立ち上がった。

フィルは階段を下りて下の階につくと、まず洗面所に行って顔を洗った。そしてそれが終わるとタオルで顔を拭きながらリビングに向かった。

窓からの日の光に照らされたリビングに据え置かれた、白く塗られた木の四角いテーブルには、ソールが用意した朝食が並んでいた。その日の朝食はパンとチーズで輪切りのトマトを挟んでこんがり焼いたトーストと、湯気を立てている柔らかそうなロールキャベツなどで、そのどれも美味しそうだった。どこで習ったのかは分からないが、ソールの作る料理の味はいつも一級品だった。

フィルが席につくと、それまで自分の朝食も食べずに待ってくれていたソールは待ち兼ねたように、子供みたいに元気な声で「いただきます」と言って食べはじめた。そして、フィルもそれに続いた。

ロールキャベツはフィルの大好物だ。ソール叔父さんもそれを知っていて、事あるごとによく作ってくれる。それも、ここ最近は回数が増えているようだった。

そしてソールの料理は、いつも通り期待を裏切らなかった。下手なプロの料理人よりもうまいのではないかと思うほどに、それらがあまりにおいしかったので、フィルはあっという間に全部平らげてしまった。

「…お、もうこんな時間か」

食事を終えてからしばらくして、ふと時計を見たソールが言った。それに釣られてフィルも時計を見ると、今日一緒に街まで行く友達

と落ち合う予定の時間の、ちょうど十分前だった。
「ほら、ぼちぼち出発しないと、また遅刻してリオちゃんに怒られちゃうんじゃないかい？」
ソールに言われて、フィルはダラダラと出掛ける準備をした。自分の部屋に戻って、壁に掛けてあった愛用している襷掛けのバッグを手に取り、部屋のあちこちを掘り返して出て来た必要な物をぞんざいに突っ込んでいく。
どうにも眠気が取れず、思考がはっきりしないまま準備を終えて、フィルはソールに急かされる様に教会を出た。

先ほどソールの話の中にも出たリオとトトは、フィルの幼なじみである。リオは教会の程近くにあるヴェルネ農園というぶどう農園の子供、トトは近所に住む鍛冶屋の息子である。ちなみに年齢で言うと、リオとトトはフィルの一つ上だ。
それらの一家を含む、アグノスの街の郊外であるソゲンの丘に住む人達は、冬になると雪のせいで街に行きづらくなる。だから、毎年秋になると、仮にその次の冬に大雪が出ても大丈夫なように、ソゲンの丘の人々は盛んに街に保存食の買い出しに行くのだ。
今回、フィル達が街に行くことになったのも、そのためである。食料だけに関わらず、服だの本だのと、それぞれ思い思いの物を買いに行くのだ。
フィルが三人のいつもの待ち合わせ場所である大きなコルク樫の下に到着すると、そこには既に他の二人が揃っていた。一人はウェーブのかかった長い赤毛を薄手の上着に垂らした、ベルボトムをはいた少女で、もう一人はボサボサ頭で、Tシャツに長ズボンのラフな恰好の少年だ。
「あっ、来た来た」
赤毛の少女・リオが、フィルの姿を認めて言った。
「フィル、おはよっ」
「おはよう、リオ」

リオの挨拶に、フィルも歩み寄りながら応じる。
「よう」
続いてトトも軽く手を挙げて言った。
「トトも、おはよう」
フィルは欠伸を噛み殺しながら言った。
「ずいぶんと眠たそうだな。夜更かしでもしたのか？」
その様子を見てトトが聞いた。
「ん…まあ、ね」
フィルは欠伸のせいで目に涙を浮かべながら、フィルは曖昧に答えた。
「…さて、これで全員揃ったわね」
そこで、場を仕切るようにリオが言った。
「それじゃ、このままここにいても意味ないし、早速行きましょ！」
そう言うが早いが、リオは待ち切れないように一番に歩きだした。街に買い物に行くときは、買い物好きのリオが先頭に立つのが常だった。そして、リオほどは乗り気でないフィルとトトは、ダラダラとその後に続くのだった。
フィル達の住んでいる場所からアグノスの街までは、大体三、四キロの距離がある。その間は灰色の石で舗装された道で繋がっている。のどかな緑の草原に囲まれたこの道路は、素朴だが牧歌的でいかにも平和な雰囲気が人々に好かれていて、ひそかにアグノスの街の名所の一つと目されてもいる。実際、フィルもこの道路は好きだ。特に、街よりも高い高度にあるこの道路から一望できるアグノスの街の風景は素晴らしかった。
「ねえ、ところで二人とも」
道の途中で、リオが口を開いた。
「例の噂、聞いた？」
「噂って、なんのことだ？」
例の噂、だけでは当然分かるはずもなく、トトが聞き返す。
「ゆうべまた『ロウ』が現れたっていう噂よ」

リオがちょっともどかしげに言った。
「ああ、ロウって言えば、ここしばらく森の近くで出没してる、例の化けオオカミのことか」
トトはやっと話が分かって、なるほどというように言った。
「なんでも、ずいぶんデカくて狂暴らしいな」
「そうよ。なんでも、目撃した人によると、体長が二メートル半もあるっていうのよ。そんなのがこの街の近くに棲んでるなんて、怖いわよねえ」
リオは道路の右側に広がる森に眼をやりながら言った。その森こそが、『ロウ』と呼ばれる化けオオカミが棲んでいると言われる森である。人々に『闇の森』とあだ名されるその森には、『ロウ』だけでなく様々な妖魔が棲みついているといわれ、最近では誰も近付かなくなっている。そのあだ名のとおり、朝だというのに森はどことなく暗く見える。
「でも、なんだかあんまり実感沸かないけど、アグノスがこうして妖魔に襲われないで済んでるのは、教会があるお陰なのよね。でしょ、フィル？」
リオはフィルに向かって言った。
「…うん、まあ、そういうことかな。邪悪な魂を持ってる妖魔は、教会には近寄れないからね」
フィルは少し間を置いて答えた。
「なによ、その張り合いのない返事は」
リオは少しむすっとして聞いた。
「そういえばフィル、最近ちょっと元気ないわね。調子でも悪いの？」
「別に、調子が悪いって言うほどでもないけど…」
フィルは慌てた様子で言った。
「…なんだかまだ眠気が取れなくて」
「もし、なにかあるんだったら遠慮なく言いなさいよ。私たち、友達でしょ？」

リオはフィルを見つめて言った。リオは昔から友情に厚く、勝ち気な性格も相まって、友達の事となるとお節介なほどに首を突っ込みたがるのだ。
「う、うん、分かったよ。でも、本当に大丈夫だから」
フィルはどこかあしらうようにそう言うと、リオは少し拗ねたように、
「分かったわよ」
と言って、歩く速度を速めてスタスタと先に行ってしまった。
「おい、フィル」
その時、トトがフィルに耳打ちした。
「リオを怒らせると怖いぞ」
「分かってるよ。たぶん、トト以上にね」
そう言ってフィルは苦笑した。

―第一章・完―

第二章　ロウフ・ベーカリー

アグノスの街は、大きな二つの島と、その周りの諸島からなるパレセリアの、東島の北部に位置するアルセイル地方に属する港町である。西側はスリト海に面していて、昔から東島と西島の間の貿易路として発展してきたという歴史を持つ街である。

その為にアグノスの街は常に人や物の流通の激しい、多様な活気に満ちた街となっている。

そして、この街の一番の特徴は、街の人々がほぼ例外なく音楽好きだということである。元々は、長い航海を終えてきた人々を歓迎し、彼らの疲れを癒し、また航海の安全を願おうということで音楽が発展してきたらしいが、いつの間にやらそれが土地に定着して、独特な文化になってしまったのだと言う。

潮風で傷まないように特殊な塗料で塗られた白い街並みは、起伏の多い地形の都合からあちこちに階段や坂が複雑に連なっていて、どこか巨大な迷路を思わせるような楽しげな雰囲気を漂わせている。

そんな複雑な構造のせいで、小さい頃からずっとこの街に慣れ親しんでいるフィルでさえ、一つ道を間違えれば今まで見たこともない場所にたどり着いてしまう事も少なくないのだった。

「ねえ、二人とも、どこか行きたいところ、ある？」

ソゲンの丘を下って、アグノスの街に入る大きなアーチ型の門にたどり着いた時、リオが聞いた。門は普段、昼間の間はずっと開けっ放しになっていて、誰でも好きに出入りすることができるようになっている。

「うーん、僕が用事があるのは図書館だけど、二人とも一緒に来たくはないでしょ？」

フィルは言った。

「そんなの、当然だろ。オレを図書館なんかに連れていってみろ、あまりの気持ち悪さに吐くぞ」
すかさず釘を刺すようにトトが言った。トトは昔から本という本がなによりも嫌いなのだ。
「でしょ。だから、図書館には後で一人で行くよ。それで、トトとリオはどこに行きたいの？」
「私はやっぱりケート洋裁店ね。今のうちに新しい冬服を用意しなきゃ」
リオはウキウキした声で言った。
「じゃあ、トトは？」
とフィルが聞く。
「オレか？オレは…」
トトは何故か一瞬言葉を詰まらせた。
「実は親父から、納品を頼まれてんだ。なんでも、お得意先のパン屋のオーブンの金具が壊れたらしくて、そのままじゃ仕事に支障が出るから、できるだけ早く届けてくれって」
「パン屋っていうと、リュムさんのところのことね。そういうことなら、最初にそっちに行った方がいいかしら？」
「あ、ああ、そうだな」
やはりトトはどこか様子が変だった。
「…どうしたのよ、トト。さっきからちょっと調子が変じゃない？」
リオは心にもなく詰問するような口調になる。例によってリオのお節介癖が出てきたようだ。それ自体が悪いとは言わないが、リオの場合は気がつくとどこか責めるような声音になってしまうので、逆効果になってしまう事も少なくない。
「べ、別になにも変じゃねえよ」
トトは慌てて言い繕うが、そのどもり具合がすでにその言い訳の効果を打ち消してしまっていた。
「なによ。もしかして何か隠し事でもしてるの？」
納得できないリオはさらに問い詰める。

「まあまあ、リオ、トトが話したくない事なら、無理に聞かなくてもいいじゃん」
そこにフィルが仲裁に入った。リオもトトも頑固なところがあるから、このままでは堂々巡りになるだけだ。
「…もう、しょうがないわね。それじゃ、とにかくまずはパン屋さんに行きましょ」
本人もその事を自覚してか、リオはむすっとしながらもあえてそれ以上言及はしなかった。
「ありがとな、フィル」
リオが先を歩いているのを見ながら、トトはフィルに耳打ちした。
「どういたしまして。でも、実際のところ、いったいどうしたの？」
とフィル。
「それは、別に…なんでもねえよ」
トトはどこかばつが悪いような顔をして、ぶっきらぼうに答えた。
「ふうん」
フィルはちょっとした悪戯心に駆られて、わざとらしく納得したふりをして見せた。するとトトは、少し怒ったようにそっぽを向いてずんずんと先へ進んで行ってしまった。

リュムという名の女性が経営するパン屋『ロウフ・ベーカリー』は、街の中心にあるミロディ広場のすぐ近くにある。広場に来るといつもどこからか漂ってくる、香ばしい美味しそうなパンの香りは、このパン屋から流れて来るのだ。
ミロディ広場は中心に噴水が据え置かれた直径百メートルほどの丸い広場で、街に住む人々にとっては暇な時間を過ごすかけがえのない憩いの場であるのと同時に、街全体で何かの行事があるときの集会場にもなる。それ以外の時は、音楽好きな街の人々が気ままに音楽を奏でたり、近所の中年層の女性達（俗に言うオバチャン）が井戸端会議を開いたりしていて、平和でのどかなムードを醸し出している。

フィル達はロウフ・ベーカリーに行く途中で、このミロディ広場に通り掛かった。すると、広場にはいつも通り噴水のさらさらという音とともに、音楽家達が気ままに奏でる音楽が流れていた。
広場を通り過ぎる途中で、ふとフィルは足を止めた。近くで二人のオバチャ…もとい、奥様方が世間話をしていた。
「…ねえ、ちょっと聞いた？闇の森にまた『ロウ』が出たんですってねえ」
「本当、世の中も物騒になったわねえ。いくら教会の力で守ってくれるって言われても、やっぱり怖いわよね」
「それだけじゃないわよ。ほら、この街って東西の貿易のお陰で成り立ってるじゃない？うちの主人も貿易商をしてるんだけど、最近、妖魔が怖くて取引先が尻込みしてるらしいのよ。これじゃ、商売上がったりだわ」
「せめてフェルネレル教団が、もっとちゃんと頑張ってくれると良いんだけどねえ…」
フィルはその世間話を、どこか複雑な気持ちで横から聞いていた。
「ちょっと、フィル、何してんのよ」
その時、遠くからリオが呼ぶ声が聞こえた。フィルのせいで足止めをくらったせいで、少し苛立っているようだ。
「…ごめん、なんでもない」
フィルはそう言うと、急いでリオ達の方に走って行った。
「まったく、勝手にいなくなったら、ビックリするじゃない」
フィルが追いつくと、リオは責めるように言った。
「リオ、フィルがちょっと立ち止まったくらいでそんなにガミガミ言うなよ。そんなんじゃいつまで経ってもカレシできないぜ」
とトト。
「う、うるさいわね。べ、別にカレシなんか、欲しくもないし」
そう言うリオは、完全に動揺していた。
「…っていうか、恋に落ちたこともないトトに言われたくないわよ」
「へえ、じゃあリオは恋に落ちたことがあるのか」

調子に乗ったトトは揚げ足を取ってからかう。
「え、それは…！」
リオはドキッとしたように言葉を詰まらせた。
「へえ、あるんだな。いったい相手は誰なんだ？」
トトはさも面白そうに言う。
「そ、そんなの、トトには関係ないでしょ！」
リオはプンプン怒って言い返した。
「はいはい、二人とも、そこまでにしなよ」
トトがなおも付け入ろうとするので、仕方がなくフィルが仲裁に入った。一応、本人達のために誤解がないように言っておくが、二人は仲が悪いという訳では全くない。むしろ、よく言う『喧嘩するほど仲がいい』という間柄なのだ。フィルはただ、それに付き合わされる第三者である自分が気疲れするから、仲裁に入っただけである。
「それより早くロウフに行くんじゃなかったの？」
フィルが言った。
「あっ、そうよ」
それを聞いてリオは思い出したように言った。
「元はといえば、フィルが勝手に立ち止まったのがいけなかったんじゃない！」
怒りの矛先が、一瞬でフィルに方向転換した。
「そ、それじゃあ、僕は先に行ってるから！」
身の危険を感じたフィルは半ば叫ぶようにそういうと、急いで広場を逃げ出して行った。
「まったく、フィルったら…」
逃げ出すフィルを見ながら、リオは腕を組んで呟いた。
「あ、もしかして…お前が好きなのって、フィルか？」
とトト。
「な訳無いでしょ」
さっきまでの慌てぶりとは打って変わって、その問いに対してだ

けは、リオは恐ろしいほど冷めた声で即答した。そしてちらっとトトを睨むと、プイっと顔を逸らすのだった。

「あら、いらっしゃい、フィル君、トト君、リオちゃん」

ロウフ・ベーカリーに入ると、カウンターの奥から、三角巾と赤いエプロンを着けた背の高いロングヘアーの若い女性が挨拶して来た。彼女が、この店のオーナーのリュム・トルキアスである。そこでフィル達も口々に挨拶を言った。

「あ、もしかして、トラスさんに頼んであった金具、届けに来てくれたのかしら？」

トトの顔を見て、リュムはふと合点がいったように聞いた。

「ああ、そうなんだ。困ってるだろうから、なるべく早く届けてやってくれって、親父が…」

トトはそう言いながら、背負っていたリュックサックから巾着を取り出した。そしてその中から棒状の金具を取り出した。どうやら、閉じたオーブンの蓋を固定するための棒のようだった。

「ほら、これで間違いないか？」

「わあ、ありがとう。本当に助かったわ」

カウンター越しにトトから金具を受け取ると、リュムはほほ笑んで礼を述べた。

「そうだ。お支払いをしなくちゃね。いくらだったかしら？」

「あ、いや…」

トトはそう制すと、ちょっと誇らしげに鼻をこすった。

「実は、その金具、オレが作ったんだ。見習いが作ったやつは、タダでいいんだ」

「えっ、コレ、トト君が作ったの？すごーい！」

リュムはまるで子供のようにはしゃぐ。

「ま、まあな」

トトは照れ臭そうに言った。あまりに有頂天になっていたせいで、その時後ろから、リオの突き刺すような視線が飛んできていた事に

は気づいていなかった。

「…どうしたの、リオ？」

トトとリュムのやり取りを後ろから眺めつつ、フィルは明らかに様子がおかしいリオを気遣って尋ねた。

「フィルは黙ってて」

気遣ってくれたフィルには一瞥もくれず、リオは二人を冷めた目で睨んでいた。

「…なによ、トトったら、デレデレしちゃって…」

少しすると、フィルに聞こえている事も気付かずに、リオが険悪な声で呟いているのが聞こえてきた。

「リオ、もしかして…ヤキモチ？」

フィルははっとして聞いた。

「え…ち、違うわよ！断じて違うわよ！だって、私がトトにヤキモチ焼く理由なんかないじゃない！ねえ！？」

リオはさっきまでとは打って変わって、真っ赤になって言った。

「ふうん、なるほどね」

フィルはにやっとして言った。これですべての辻褄が合った。そして、続けて言った。

「僕は、お似合いだと思うよ」

「ちょっと、フィル、勘違いしないでよね！私は、ただ…ただ……」

リオはすぐに言い訳しようとしたが、うまい口実を思いつけなかったのか、言葉を詰まらせた。そして、その事で余計にばつが悪くなる。

「大丈夫だよ、トトに告げ口なんてしないから」

フィルは苦笑いして言った。

「え、ホントに！？……あ」

つい口を滑らせてしまった事に気付いたリオは、咄嗟に口に手をやった。今の話が聞かれていないかどうか確認するために、トト達の方に目をやる。幸運にも、トトとリュムは金具の調子を見るため

に、オーブンのある厨房に入っているところだった。
「…フィル…ホントに…トトにばらしたりしたら、ただじゃ置かないからね…」
「…はーい」
ただならぬリオの様子に、フィルはそう答えるしかなかった。

―第二章・完―

第三章　フォナル図書館

「さてと、それじゃ、フィルはこれから図書館に行くんでしょ？」
オーブンの金具の受け渡しが終わり、三人がロウフ・ベーカリーを出ると、リオが聞いた。
「うん、そういう事になるかな」
とフィルは答えた。
「…それにしても、お前、いっつも図書館でなに調べてるんだ？」
続けてトトが不思議そうに尋ねる。
「え？まあ、それは…ちょっとね」
フィルははぐらかすように言った。そして話を逸らそうと、続けて言う。
「それより、トトはどうするの？もう用事は終わったんだろ？」
「ああ、そうだな…他にやることも思い付かないし、どうするかな」
トトは答えた。
「それなら、リオが洋服買いに行くのについて行ってあげたら？」
トトの返答を見越していたフィルが提案する。リオがちょっと驚いてフィルを見たので、フィルは意味ありげに目配せした。
「なんでオレがリオのお守りしなきゃいけないんだよ」
と不満げな声でトトが言い返した。
「それがいやだって言うんだったら、僕と一緒に図書館にでも行くかい？」
「リオ、こんなガリ勉はほっといて、さっさと行こう」
フィルの言葉に悪寒を感じたのか、不気味な物から逃げようとするかのように後退りしたトトは、口早に言った。そしてリオの腕を掴んで歩き出した。
「それじゃ、フィル、お昼頃にまたここで会いましょ！」
リオはトトに引っ張られながら背中越しにフィルを見て、心なしか上機嫌な声で言った。そしてウィンクをすると、トトと一緒にそ

の場を去って行った。
「…さてと、」
フィルは頭の後ろを掻いて言った。
「僕も、自分の仕事を始めるとするかな」
そう一人ごちて、フィルは今回街に来た目的である図書館に足を向けた。

アグノスの街唯一の図書館・フォナル図書館は、街の南東の端っこであるシーヤ地区にある。賑やかさが一番の売りであるアグノスの街の中で、この南東の一角だけは例外的に閑静で、のどかでゆったりとした時間が流れている。たぶん、この静けさは、街の端に位置するために人家が少なくなり、反比例的に緑が多くなったという歴史的背景に起因するのだろう。
南東から射す日の光りが、道路の上をアーチ状に囲むほどに巨大に成長した街路樹を通して、木漏れ日となって降ってくる。そしてそれに、紅葉によって黄色く染まっている街路樹の葉がマッチして、幻想的な風景を作り出している。
そんな道路の突き当たりに、フォナル図書館はあった。赤いレンガが積み上がってできた、教会にも似た形をしているその建物は、見ていて不思議と安心感が沸いて来るので、フォナル図書館は、自分の家でもある教会を除けば、フィルがもっとも好きな場所だった。
図書館に入るとすぐの所にカウンターがあった。そこではほっそりした中年の女性が椅子に座り、机に開いてある帳簿に何かを盛んに書き込んでいた。そして何かを書き入れる度に、自分の右側に高く積まれた本を左側のワゴンの中に並べていっている。知的なメガネをかけた、いかにも真面目そうな顔をしたこの女性は、フォナル図書館の館長兼司書のヴィエラ・クイルスである。
「こんにちは、ヴィエラさん」
フィルが声をかけると、ヴィエラはそれまでにらめっこしていた帳簿から顔を上げ、フィルを見た。

「こんにちは、フィル・トワイライト。またソールさんに頼まれて来たのですか？」
ヴィエラはカチャッとメガネの位置を正しながら、淡々とした声で聞いた。
「はい。それでまた、資料室に入らせてもらいたいんです」
とフィルは答えた。フィルの言う資料室とは、この図書館の二階にある、人間を襲う邪悪な存在・妖魔に関する様々な資料を納めた書庫の事である。フェルネレル教団に属する使徒の一人として、敵である妖魔について研究しているソールは、自分の研究の為に、度々そこの資料を借りるのだ。
「いいでしょう。もともとあそこにある資料は、アグノス教会の前の建物にあったものを、この図書館が預かっているだけです。御自由にお持ちなさい」
そう言ってヴィエラは、カウンターの引き出しを開けて、資料室に入るための鍵を探していたが、不意に何かを思い出したように顔を上げた。
「ああ、思い出た。今、ニーナが資料室に入っているから、鍵は空いてるはずよ」
「分かりました。それじゃ、行ってみます」
そう言うと、フィルはその場を後にした。

フィルが図書館の奥にある階段を上り、二階につくと、そこは分類別にいくつもの部屋に分けられた書庫の入口が並ぶ廊下になっていた。その中でも、一番奥にある書庫が、妖魔の資料室である。
フィルがその、いかにも重たそうなドアノブを押すと、確かに鍵は開いていたようで、ドアはゆっくりと内側に開いた。
資料室は、開け放たれた窓を通って入ってくる日光によって白っぽく見える所と、影になって真っ暗になっている所とがはっきりと分かれていた。そして、その白くなった部分には、誰かが雑然と積み上げた本によって、見事なまでに堅牢な『本の砦』が出来上がっ

ていた。
フィルは、自分の肩ほどまでの高さの砦の中を覗き込んで、言った。
「おはよう、ニーナ」
中には、本人の胴体くらいもある巨大な本に没頭する、大きな四角いメガネをかけた小柄な少女が座っていた。突然頭上から声が降ってきたので、少女は文字通り飛び上がった。その時、少女の肘が本の砦の内壁にぶつかった。すると、絶妙に保たれていた砦のバランスが一気に崩れて、砦を構成する大量の本が、フィルに雪崩かかってきた。一瞬の後、あわれフィルは本の下敷きとなっていたのだった。
「あわわ、フィルさん、大丈夫ですか！？」
覆いかぶさる本越しに、少女・ニーナの声が聞こえた。それに続いて、ニーナが本を掻き分ける音も聞こえる。
少しして、体が動かせるくらいに本がどかされると、フィルはバサバサと本を振り落としながら、崩落現場を脱出した。
「ごめんなさい、フィルさん！」
ニーナは自責の念でやり切れなさそうな声で謝った。
「わたし、本に夢中になってると、周りの音に敏感になっちゃうんです。そこにフィルさんが声を掛けてきたものだから…」
「いいよ、そんなに気にしなくて。そもそも、突然声をかけた僕も悪かったんだし」
ニーナがあまりにも深刻な、済まなさそうな顔で謝るので、フィルは慌てて言った。
「それにしても、ニーナも物好きだね。僕やソール叔父さんみたいに、教団の関係者として勉強するためならともかく、趣味で妖魔の資料を読むなんて」
「えっ…あ、それは…まあ」
ニーナは自信なさ気に答えた。
「わたしって、変わり者だから…」

「別に、そういう意味で言ったんじゃないよ。ただ僕は、小説とかを読むのは好きだけど、資料みたいなのはそんなに好きじゃないから、ニーナってすごいなって思って」
フィルは言った。
「すごい、ですか…？」
ニーナはおずおずと聞き返す。
「うん。だってニーナって、どんな本を読むときでも、すごく生き生きとしてるじゃん。僕もそんな感じに資料を読めたら、勉強も苦じゃなくなるのになって」
フィルはそう言って苦笑した。
「…さてと、僕は妖魔の資料を探さなきゃ！」
「あのう、わたし、手伝いましょうか？」
ニーナは控えめな声で言った。
「え、いいの？それは助かるよ。『セルペンテ』っていう妖魔の事を調べたいんだけど」
フィルがそう言うと、ニーナはちらっとフィルを見た。
「…確か、蛇の姿をした妖魔ですよね。それだったら、妖魔全書の五巻あたりとか…」
ニーナは右の人差し指を下唇にあて、考え込んで言った。
「まさか、全部覚えてるの？」
「そうじゃないんです…妖魔全書は、名前順になってるから、そこから推測したんです」
「なるほどね。それで、妖魔全書の五巻って、どこにあるか分かる？」
そうフィルが尋ねると、ニーナはおもむろに、崩壊した『本の砦』を指差した。
「ありゃりゃ…まあ、どっちにしても、これは片付けないとね」
フィルは頭の後ろを掻きながら言った。

「ちょっとトト、私がこんな服を着る訳がないじゃない！」
リオはそう言って、ハリセンでトトの頭をひっぱたく。
「いってぇな、服一つ勧めただけでなんで叩かれなきゃいけないんだよ。つか、そのハリセンどっから出したんだよ！？」
トトは叩かれた頭を庇いながら言う。
「だいたい、この服のどこが悪かったんだよ？」
「私はね、そういうモコモコが何より嫌いなのよ！そんなの、言われなくたって分かるでしょ？」
リオはトトが手に持っている服の、襟や袖口についた羊毛のモコモコを指差して、不満げに言う。
「分かるわけないだろ！以心伝心じゃあるまいし」
「察しなさいよ、こう、雰囲気で！」
「なんだよ、そのムチャ振りは！」
トトは呆れて言い返す。
「大体、なんでオレがお前の服選びに付き合わなきゃならないんだよ。せっかく服を勧めてやったのに、そうやってカリカリ怒るんだったら、オレはもう帰るぞ」
「え、そんな…ちょっと待ってよー！」
トトが本気で店を出て行こうとするので、リオは慌てて引き止めるのだった。

「ところでフィルさん、セルペンテの何を調べるつもりなんですか？」
ニーナは崩れた本を棚に戻しながら、何気なく尋ねた。
「え？ああ、それは…彼らがどんな場所にに『巣』を作るのかが知りたいんだ」
フィルは答えた。
妖魔には、姿も力も巨大な『親』と、その親から生み出される『子』の二種類がいる。教会の名の元に妖魔を退治する『祓魔師』が

妖魔を浄化して倒すときは、いくら『子』を倒しても、その『親』を倒さないかぎり『子』を増やされつづけてしまうので、その根源を断つために『親』が潜んでいる『巣』の位置を調べることが重要となるのだ。

「そうですか…でも、どうしてフィルさんが、そんなことを？」

ニーナは首を傾げて聞いた。祓魔師であるどころか、直接妖魔と関わることもないフィルが、何のためにそんなことを調べるのか、と疑問に思うのは、ごく自然なことだった。

「まあ、ちょっと興味があってね」

フィルは曖昧に答えた。

「それに、最近闇の森に、セルペンテが棲み着いてるみたいだから、念のためにね。こういう情報が、いつ必要になってもいいようにしておかないと」

「え、そうなんですか？」

ニーナは驚いたように言った。

「知らなかった？」

フィルは振り返って聞き返した。

「はい…だって普通は、妖魔が出たら大騒ぎになるじゃないですか。でも今、セルペンテが出たなんて噂、流れてませんよね」

ニーナは少し訝るようにフィルを見た。

「…あの、もしかして、フィルさん…」

「あ、あったあった。妖魔全書の五巻！」

その時ちょうど、大分片付けられた崩落現場から、目的の本を発見して、フィルが嬉しそうに言った。ニーナは突然のフィルの声にびくっと驚いて、喋ろうとしていた言葉は尻すぼみにどこかへ消えて行ってしまった。

「さてと、セルペンテは…あった！ニーナの言う通りだ」

早速セルペンテの頁を見つけると、フィルは自分の欲しい情報を見つけようと、文章を斜め読みした。

頁の左上には、セルペンテの文字ととぐろを巻く蛇のスケッチが

描かれている。その下には、平均的な体格などが記されている。そして、右の頁から数頁に渡って、文章による説明が綴られている。
「えーっと、『セルペンテは、地面に長い穴を掘り、そこに巣を作る。巨大な体を持つセルペンテの巣は、広い土地を必要とする。また、身近に餌があって、人間から見つかりづらい森を好む習性がある。したがって、巣を作るのは地下に充分な場所があり、かつ邪魔になる大木などのない、森の中の広い空き地である』か…セルペンテの親は体長が十五メートルもあるから、闇の森で巣を作れる場所はかなり限定されることになるかな」
フィルは独り言を言いながら、パタンと本を閉じた。
「手伝ってくれてありがとう、ニーナ。お陰で早く見つかったよ」
「いえ、そんな…わたしの方こそ、フィルさんに本をぶちまけちゃったりして、すみませんでした…」
「だから、それは気にしなくていいって」
フィルは手を振って言った。
「それじゃ、さっさと残りの本を片付けちゃおう」
そう言って苦笑するフィルを、ニーナは意味ありげに見つめるのだった。

―第三章・完―

第四章　ロウとセルペンテ

昼だというのに日が射さず、真っ暗で静寂に満ちた『闇の森』。その奥深くにある、一本の木すらも生えていない巨大な空き地。そこに、直径一メートルはあるかという洞穴があった。その奥からは、洞窟特有のヒューヒューという風が吹く音が聞こえてくる。

周りに、生き物の気配はなかった。ただ、その洞窟の中からだけ、何か、悍ましい気配が風に逆行して漂って来ていた。

突然、洞窟の中からザラザラと、何かが地面を擦る音がした。その音は始めは小さかったが、次第に大きくなって行った。そしてそれが最大に達した時、洞窟の出口に、シュルシュルと動く枝分かれした舌が現れた。そしてそれに続いて、不気味に光る巨大な蛇の頭部が姿を表した。色は紫色で、目は真っ赤にぎらついている。そして、緑色の舌をしきりに出し入れしながら、滑るように蛇行して穴からはい出てきた。

そして、体のすべてが巣穴から出てきたが、その長さは五メートルほどだった。まだ舌を出し入れしていたが、不意に何かを嗅ぎ取ったように、ある方向に頭を向け、そちらに向かって移動しはじめた。

大蛇がスルスルと蛇行して行くと、やがて森は途切れ、大蛇は陽光に曝された。よほど光に弱いのだろう、蛇は悲鳴を上げ、安全な森に逃げ戻り、木陰から外の様子を窺っていた。

そうしている内に、だんだんと空に雲が現れはじめた。さっきまでは晴天だったのが、あっという間に辺り一帯は真っ黒な雲に覆われて行った。そしてその雲は太陽を取り囲み、徐々に包囲網を狭めていき、やがて太陽を覆った。そして、昼とは思えないような闇が訪れた。

それをじっと見ていた蛇は、太陽が覆われると共に、嬉々として森を抜け出して行った。その目指す先には、白い建物が並ぶ街があ

った。

「どうしたのかしら…さっきまであんなに晴れていたのに」
リオは不安げに空を見つめて言った。こんなにあっという間に空が雲に覆われるなんて、いくらなんでも不自然すぎる。それも、白い雲ではなく、真っ黒な雲なのだ。
「確かに妙だな。何が起こってるんだ？」
隣に立っていたトトも、空を眺めながら言った。
「それにしても、フィルのやつはどうしたんだ？昼頃に集合するって、ちゃんと言って置いたはずなのに」
「ホントよね。あの子、なんであんなに時間にルーズなのかしら」
リオは腕を組んで賛同した。
「そりゃお前、お前のことが怖くて気後れするんだろ」
トトは冷やかし声で言う。
「なによ、それ！そもそも、私に怒られたくないんだったら、なおのこと時間通りに来ればいいじゃない！」
リオはプリプリして言った。
「だってお前、時間だけじゃなくてなんでもかんでもガミガミ言うじゃないか」
「それは、どっかの男どもがあんまりだらし無いもんだから、その分私がしっかりしなきゃいけなくなるんじゃないの」
リオは横目でトトを睨む。
「本当だったら、私だってもっとこう、女の子らしく、おしとやかでいたいわよ。なのにあんた達が…ってちょっと、トト、なんでそんな吐きそうな顔してるの！」
「だって、お前がおしとやかになるなんて、考えただけで吐き気が…」
トトは喉を押さえて、ゲーゲー吐く真似をして見せた。
「もうっ、失礼しちゃう！…あっ」

その時、リオは建物の隙間から、向こう側の道を走る見慣れた灰色の髪を見たような気がした。
「あれ、今通ったのフィルじゃない？あの子どこ行こうとしてるのかしら？…ちょっとトト、いつまでも吐く真似なんかしてないで、フィル追っかけるわよ！」
リオは約束をすっぽかしたフィルに制裁を与えるためにハリセンを手に構え、もう片方の手でトトの首根っこを掴んで引きずりながら、フィルの後を追っかけて行くのであった。
リオとトトが、フィルを見かけた建物の隙間を通って向こう側の道路に出ると、ちょうどフィルが角を曲がるところが目の端で確認できた。あと一瞬行動が遅れていたら、見逃してしまっていただろう。そこでリオは、すぐさまフィルが曲がった角へと走った。その後を、慌てたトトがついて来る。
（…この道順って、ソゲンの丘に向かうルートよね。フィルったら本当にどこに行くつもりなのかしら）
リオはますます訳が分からないまま、フィルの追跡を続けた。フィルがさっき曲がった角を曲がると、またしてもギリギリフィルがその先の角を曲がるのが見えた。
「ほら、トト、なにノロノロしてんのよ！フィルを見失っちゃうじゃない！」
トトが遅れて追いついて来るので、リオは苛々して言った。
「お前…実はちょっと楽しんでるだろ」
「そりゃそうよ。追跡任務なんて、スパイみたいでカッコイイじゃない！」
リオは目を輝かせて言う。
「ほら、さっさと行くわよ！」
やっと追いついてきた愛しのトトの手を掴んで、リオは張り切った声で言った。
「ったく、これだからリオのお守りは嫌なんだ」
トトはブツクサと言いながら、リオにされるがままに引っ張られ

て行くのだった。
どうやらリオの予想通り、フィルは街を出てソゲンの丘に向かっているようだった。リオとトトは、フィルに気づかれないように少し離れてそれについて行った。
そうしている間に、雲行きはさらに悪くなって行った。こんなに雲に覆われているのにまだ雨が降り出さないのが不思議だった。
フィルは街の門を出ると、家のある真っすぐの方向ではなく、左側の道へと足を向けた。
「フィルったら、本当にどこに行くつもりなのかしら」
リオはフィルの後ろ姿を眼で追い掛けながら、ふと口に出した。
「それより、お前、こんなに走り続けて、なんでそんなに、元気なんだよ」
そこに息も絶え絶えのトトが追いついてきた。
「だらし無いわねえ、トト。これしきのことでヘバってんじゃないわよ！男でしょ！？」
リオは腕を組んで言った。
「無茶、言うなよ…」
「さっ、それじゃ行くわよ！」
「待って…せめて、ちょっと、休憩を…」
そう言いながらも、リオに逆らうとどうなるか、よく弁えているトトは、後について行くしかないのであった。

フィルは、ふと立ち止まって後ろを振り返った。誰かがついて来ているような気がしたのだが、気のせいだったのだろうか、後ろには誰もいなかった。
そんなことをしている暇がないことを思い出して、フィルは再び走り出した。
今、空を覆っている雲、これは間違いなく妖魔が作り出したものだ。昔、ソール叔父さんから教わったことがある。妖魔は日の光に

は極端に弱い。そのため、普通は妖魔が活動するのは夜中なのだが、妖魔が昼間に活動するときは、こういう風に黒い雲を呼び出して、太陽の光を遮るのだ。

実物を見るのは初めてだったが、この雲がそれであるのは疑う余地もなかった。

だとしたら、それは妖魔が行動しようとしていることを示している。当然、その目的は人間を襲い、喰らうことだろう。

幸い、妖魔の住処である闇の森からアグノスの街までは距離がある。どうにか、街に着いてしまう前に妖魔を探し出したかった。

フィルは街を出ると、闇の森がある北側へと進路を取った。行く手の右側には、欝葱とした闇の森が見える。妖魔の進路を予想してみても、妖魔とぶつかるのはそう遠くはないだろう。

どうやら、間に合いそうなので、フィルは少し歩調を緩めた。妖魔と遭遇する前にバテてしまっては、なんの意味もない。

やはり、誰かがついて来ている気がしてならない。だが振り返っても、誰もいない。その時、近くの背の高い叢が不自然に揺れたのだが、フィルはそれには気づかなかった。

その時、シャーシャーと細い隙間から風を押し出したかのような音がした。フィルが振り返ると、そこには全長五メートルほどの細長い体、しきりに突き出される緑色の舌、そして真っ赤に輝く目があった。

「やっぱり、この雲は妖魔のせいだったんだ。念のため、アレを持ってきておいてよかったよ」

フィルは、自分の数倍の大きさの妖魔・セルペンテを前にしても、まったく怯む事なく落ち着いた声で言った。セルペンテは、隙あらばフィルを食ってやろうとしているようだったが、なかなかその隙を見つけられないでいた。

そしてフィルは、襷掛けにしていたバッグを地面に下ろすと、そこから何かを取り出した。

縛っていた紐を解き、フィルが広げたそれは、一枚のマントだっ

た。フィルの髪と同じ色合いの、灰色のフード付きのマント。背中部分には、何か不思議な紋様が描かれている。
「人間に手を出すことは、僕が許さない！」
フィルはそう言うと、マントを身につけた。ちょうどその時、セルペンテは待ち切れなくなったように、口を大きく開いてフィルに襲い掛かった。しかしフィルはそれを躱そうとはせず、ただ、マントを翻した。
すると、フィルの体が灰色のオーラに包まれた。そのオーラがセルペンテの牙を弾き、セルペンテは驚いて後退した。
灰色のオーラはフィルを包んだまま大きくなっていき、突然弾けた。するとその中から現れたのは、フィルではなかった。
二メートル半もある巨体、灰色の体毛、体毛よりも濃い灰色の瞳、銀色の爪を生やした四本の脚。
そこに現れたのは、巨大なオオカミだった。

「うそ…何これ…何がどうなってるの！？」
叢からその様子を見ていたリオとトトは、文字通り絶句していた。さっきまでフィルがいたところが、灰色のオーラに包まれ、それが消えるとそこにはオオカミ、それも街で噂になっている妖魔『ロウ』が現れたのだ。気が動転するのも当然である。
「まさか…狼、人間…？」
まだ驚きからまったく立ち直れないトトの口から、自然と言葉が漏れた。
その時、ロウが吠えた。周囲の草をそよがせるほどの雄叫びに、リオもトトも反射的に顔を腕で覆った。

セルペンテは怒りの篭った眼で、ロウを睨みつけた。威嚇のために大きく開かれた顎に生えた牙からは、緑色の毒が滴っている。
対するロウの方は、怒りというよりむしろ哀れみのようなものが篭った眼差しで、セルペンテを見つめていた。

二匹は少しの間睨み合っていたが、やがて、セルペンテが先に行動を起こした。
セルペンテが真っすぐ襲い掛かってきたのを、ロウは横っ跳びに躱した。セルペンテが振り返ろうとする隙に、今度はロウが襲い掛かる。銀色に輝くロウの牙と爪がセルペンテに食い込んで、気味の悪い緑色の血をほとばしらせた。
セルペンテが倒れ込んで、地鳴りを響かせた。ロウはすぐにそれを脚で押さえ込もうとするが、自分の倍の大きさのある大蛇がのたうちまわるのを押さえつづけることが出来ず、一先ず後ろへと下がる。
セルペンテは狂気に満ちた声を上げて、体勢を立て直した。ロウにつけられた傷痕からは、緑の血が滴り続けている。
セルペンテが再び躍りかかって来ると、ロウは体を素早く一回転させた。すると、ロウの長い尻尾が鞭の様にしなり、セルペンテに打ち付けられた。その攻撃でセルペンテが怯んだところに、ロウが襲い掛かり、その胴体に噛み付いた。
セルペンテは再びのたうちまわってロウを振り落とそうとしたが、ロウは今度は簡単には放さなかった。
二匹の妖魔は縺れ合ったままのたうち、互いの体を地面に打ち付け、互いに致命傷を与えようと暴れ回った。そして、セルペンテの毒がたっぷり付いた牙がロウに噛み付きかけたので、ロウは急いで跳びのいた。セルペンテの攻撃は躱せたが、そこに一瞬の隙ができた。
セルペンテはその隙をついて飛び掛かった。今度は横に跳んで避けられるだけの猶予もない。もはや、ロウの負けは決まったようなものだった。
しかし、セルペンテの毒牙がロウに突き刺さる、まさにその瞬間、ロウは灰色のオーラに包まれた。セルペンテの牙は空を貫き、セルペンテ自身も飛び掛かった勢いのまま地面にたたき付けられた。
そして、それまでロウがいた場所には、マントを身につけたフィ

ルが立っていた。そしてフィルは再びマントを翻すと、灰色のオーラに包まれてロウへと変身した。
そしてロウは、完全な隙を作ったセルペンテに飛び掛かり、その胴体に長く鋭い爪を食い込ませた。
するとセルペンテは光に包まれていき、その体は崩れて行った。セルペンテの姿が完全に消えた後、そこには白く輝く一つの光の球が浮いていた。光の球は少しの間そこに留まっていたが、少しするとどこかへ飛び去って消えて行ってしまった。
セルペンテが完全に消滅すると、ロウは灰色のオーラに包まれて、フィルへと戻った。
フィルはふと近くの叢に目をやった。たった今目の前で起こったことに驚くあまり、リオとトトは自分達がフィルから丸見えになっていたことに気がついた。
リオとトトが何か言おうとすると、フィルは悲しそうに目を伏せて、その場から立ち去って行った。

―第四章・完―

第五章　狼人間

優しいそよ風が草をなびかせるソゲンの丘、そんな草原に建つアグノスの教会。その赤い三角屋根の上から、物静かなフルートの音色が聞こえてきた。

教会の屋根の上に座ったフィルは、愛用の細長い横笛を持ち、その唄口に息を吹き込む。すると管の中を通った空気が音を生み出し、虚空に侘しく響き渡る。そのもの悲しげなトーンは今のフィルの心境を如実に表していた。

フィルはフルートを吹く手を止めて、纏っているマントのフードを目深に被った。このフルートとマントは、フィルの両親がフィルに残してくれた数少ない物の内の二つだった。

特にこのマント、普段はフィルの中に眠っている狼人間としての能力を引き出し、フィルをオオカミに変身させるための媒介であるこのマントは、フィルにとっては代えがたい宝物だ。

フィルがまだ幼いうちにどこかへ立ち去って行ってしまったフィルの父親・ファルシウスは、狼人間だったらしい。フィルが狼人間としての自覚を持ちはじめた頃に、ソール叔父さんがそう話してくれた。

言うまでもなく、狼人間とは普通の人間から見れば異形の存在であり、恐怖と嫌悪の対象だ。生まれながらにして狼人間であったフィルが、普通の人間の中で暮らして行くためには、その正体を知られない事が絶対条件だった。

だが、見られてしまった。いずれこういう日が来ることになるだろうと、覚悟はしてきたつもりだった。だが、実際に直面してみると、何をどうしていいか分からなくなってしまった。

例え他の誰に気づかれることになっても、気付かれたくなかった親友の二人に見られてしまったのだ。どんなに二人がフィルにとって親友だったとしても、いや、だからこそ、それが狼人間だと知っ

た時のショックは大きいだろう。そして、きっと裏切られたように思い、フィルを怖れ、嫌うようになるだろう。
もう、アグノスにはいられない。それが、今の時点で分かっているただ一つの事実だった。すぐにでも、ここを立ち去って、どこか、ここからの噂が届かないような場所に移らなければならないだろう。
アグノスの街もソゲンの丘も、そこに住む人々も大好きなフィルにとっては、そう考える苦しさは計り知れなかった。

「私、未だに信じられない…まさか、ロウの正体が狼人間で、しかも…フィルだったなんて」
叢に寄り掛かって、リオは胸を手で押さえながら、喋るのも辛い様子で言った。ロウは恐ろしい妖魔だという噂を前々から聞いていたのもあって、頭が完全に混乱していた。
「ねえ、トト…私たち、これからどうしたらいいのかしら」
リオはいつになく覇気のない、弱々しい瞳でトトに縋るように聞いた。
しかし、トトは答えなかった。リオの事を無視している訳ではない。トトも同じことで頭が一杯で、リオに答えるだけの余裕がなかったのだ。トトは何も言わず、考え込むようにどこか遠くを見つめていた。
「フィルは教会に住んでいて、ボケッとしてるけど根はいい子で、私たちの親友で…でも、ロウは人を襲う狂暴で、恐ろしい妖魔で…私、何がなんだか…」
リオは弱音を吐いて、頭を掻きむしった。
「何か、引っ掛かる…」
ふいにトトが呟いた。
「…なにが？」
リオが聞き返すと、トトはちょっと驚いたようにリオを振り返る。自分の傍にリオがいることも忘れるほど、トトも気が動転している

ようだった。
「さっきのフィルの行動…どうして、妖魔と妖魔が戦っていたんだ？」
「それは…もしかして、縄張り争いとか？」
リオは咄嗟に思い付いたことを口にした。実際、そうだと考えれば一応、辻褄は合う。
「そうかもしれない。でも…そうじゃないかもしれない」
トトは言葉を選ぶようにゆっくりと言った。
「どういう意味よ」
リオはさらに続きを促すように聞く。
「フィルは、もしかしたら…あの蛇の妖魔から街を護ろうとしたのかもしれない」
トトは顎に手をあてて言う。
「でも、ロウは今まで何度も街の人間を襲ってるのよ！それに、妖魔は人間の敵であって、味方じゃないわ」
リオはすぐに反論する。トトもそれに言い返すことは出来ず、二人は黙り込んでしまった。
「…オレ達二人とも、一人になって考える時間が必要かもしれないな」
しばらくして、トトが口を開いた。
「この事はまた明日話し合おう。それまでは、フィルの正体については他の人には明かさない方がいい」
「そうね、それがいいと思う…」
リオも意気消沈した声でそれに賛成した。

「…なあ、親父」
その日の夜、トトは自分の父親・トラスに声をかけた。トラスは、鍛治屋としての仕事を終えて、使った道具を片付けている途中だった。

「なんだ、トト」
トラスは振り返って聞いた。
「ちょっと相談したいことがあるんだけど、いいか？」
「お前が相談事とは珍しいな。なんだ？アグノス一頼れる男のこのオレが相談に乗ってやるぞ」
トラスはニヤッと笑って言った。
「ったく、どうせまた『自称』だろ」
「悪いかよ」
本人では最高傑作のギャグを言ったつもりのトラスは、上機嫌に言う。
「はあ…」
いつも通りの陽気な父親の様子に、真剣に相談を聞いてくれる気がまったくしないので、トトはため息をついた。
「親父、オレ、結構真剣なんだけど」
「分かった分かった、そんな怖い顔すんなよ。相変わらずそういう所だけはかーちゃんに似てやがる」
トラスはまた冗談を言いつつも、さすがに少し真剣な顔になった。
「親父、もしもさ…もしも、信じてた親友が、実は裏ではすごく悪い奴かもしれないって分かったら、親父だったらどうする？」
トトは言った。
「ほお、なるほどな。お前もそういう事を経験する年頃になったって訳だ」
トラスは何故か少し嬉しそうに言う。
「親父…」
「分かってる、分かってるって。真剣に話せってんだろ」
トラスはそう言うと、大きな欠伸をした。
「なぁに、こう見えてオレもよぉ、お前の三倍はいろいろ経験してきてんだよ。いいから、黙って聞け。
まだお前が生まれる前の事だったな。その頃オレには仲のいい呑み仲間がいてよぉ。ファルシウスってんだが、そいつはスゲーいい

奴でよ、よく酒場に行って酒を酌み交わしてたのさ」
　トラスは昔を思い出すようにして言った。
「本当に、あいつはいい奴だった。だからよ、あいつが狼人間だったって知ったときゃ、そりゃ驚いたもんだぜ」
「ちょ、ちょっと待った！」
　トラスがさらっと言ったあまりに唐突な発言に、トトがストップをかけた。
「それって、もしかして、フィルの父親か！？」
「そうだが、それがどうしたんだ？」
　トラスは無頓着にキョトンとして聞き返す。
「ちょっと待って、気持ちを落ち着けないと…」
　トトはそう言って、胸に手をあてて深呼吸した。そして少し経って落ち着いてきたので、再び口を開く。
「…どうして、ファルシウスさんが狼人間だって知ったんだ？何かの拍子で見たのか？」
「あ、いや、それはな…酔った勢いで、ボソッとな」
（フィルのお父さんって、結構迂闊だったんだな）
　トトは心の中で呟く。
「それで、それを知って、親父はどうしたんだ？」
「そりゃ別に、どうってことなかったぜ」
　真剣なトトとは対照的に、トラスは平然と答える。
「どうってことなかったって…なんだよ、それ」
　トラスの答えに、トトは呆れて言った。
「だからよ…オレはな、そん時思ったんだよ、オレの知ってるあいつを信じてやろうってな」
　トラスは、自分ではドラマのクライマックスのワンシーンを演じているかのようなつもりで、わざとらしい声で言った。
「あいつが狼人間だろうが何だろうが、オレが仲良くしていたあいつは本物だって思うことにしたんだ」
「やっぱ親父ってすげえな…いろんな意味で」

トトは頭の後ろを掻きながら言った。
「ま、いいや。ありがと、参考になった」

その夜、部屋に戻ったフィルはランプを点けて、本棚から四つ折になった紙を取り出した。机に持って行ってそれを広げると、それは闇の森の地図だった。森の地形や植生が事細かに記されていて、その上にフィルの筆跡で様々な書き込みがされている。
フィルは椅子に座り、ため息を一つつくと、ペンを手にもって地図を凝視しはじめた。セルペンテが営巣するのは森の中の広い空き地。ざっと地図を見渡すと、それらしい空き地は東側、北東、南西に合計三つ見つかった。
「地図からじゃこれ以上はしぼれない、か」
フィルは呟いた。
「でも、セルペンテが他の街じゃなくてアグノスを狙ったっていう事は、西側の方が可能性が高いから、そっちから順番にしらみ潰しに見ていくのがいいかな」
その時、部屋のドアを叩く音が聞こえた。
「どうしたの？ソール叔父さん」
フィルがそう聞くと、気遣わしげな声が返ってきた。
「今、リオちゃんが下に来てるんだけど、会うかい？」
今日まではソールは、フィルが狼人間である事を知っている唯一の人間だった。そして、今日フィルがリオとトトに狼に変身するところを見られたということも承知している。
「ううん…悪いけど、帰ってもらって」
フィルは複雑な心境で言った。
「分かった」
ソールは存外にも素直に了承した。そして、ソールが階段を下っていく音が、扉越しに聞こえた。

「…やっぱり、帰ってほしいって」
一階に下りたソールは、ダイニングルームで椅子に座っていたリオに言った。テーブルにはソールがリオのために入れた紅茶が置いてあったが、リオはそれには手を付けていなかった。
「そうですか…」
リオは肩を落として言った。
「ごめんなさい、こんな夜分遅くにお邪魔したりして…」
「いいや、謝るのはこっちの方だよ。こんな事を突然知ることになっちゃって、ショックだったろう？」
ソールは親身な声でそう言いながら、リオの向かい側に座った。
「はあ…」
リオは目を伏せて様々な迷いを抱えたような声で言う。
「フィルも、ずいぶん悩んでたんだ。君達にこの事を話すべきか、どうか。いずれ分かることだから自分の口から言った方がいいって、僕は言ったんだけど、フィルはどうしても、君達とは普通の人間として友達で居たかったらしいんだ」
ソールは淡々と話した。
「それだけに、他の誰よりも君達だけには、バレたくなかったんだろうね。相当落ち込んでるよ」
「…あの、ソールさん」
リオは少し顔を上げて口を開いた。長い赤毛が少し揺れる。
「何だい？」
「フィルは、その…人を襲ってるんですか？」
リオは勇気を出してその疑問を口にした。今日は、そのためにここに来たのだ。
「君は、どう思うんだい？」
質問に対して、ソールは意味深に返す。
「私…私は、フィルを信じたい…でも、狼人間って、変身すると正気を失うって聞いたこともあるので…」

「そうだね、狼人間はそう沢山いる訳じゃない。それだけに、様々な憶測や偏見が噂されるけど、フィルがどんな狼人間かをはっきりさせる、簡単な方法があるよ」
ソールはちょっといたずらっぽく言う。
「それは、何ですか…？」
リオが先を促す。
「リオちゃんは、どうして『ロウ』がこれだけ街の噂になったと思う？君も見た、闇の森に棲んでるセルペンテっていう蛇の妖魔の噂は、まったく立っていないというのに」
「それは…目撃者がいたから…っていう事は…ロウを見ても、生き残った人達…」
そこまで考えて、リオはソールの言わんとすることの意味を悟った。今まで、ロウに誰かが殺されたという話は、聞いていない。
「フィルが狼に変身するのは、妖魔が出没した時だけ。妖魔が出た時に、街の人間が森に近づいたら大変だしね」
ソールはリオを後押しするように言った。
「もしその気があるんなら、明日また来てよ。その時には、フィルも今よりは落ち着いてるだろうからね」

―第五章・完―

第六章　危険の予感

「フィル、もしかして今日、セルペンテの巣に行く気じゃないだろうね？」
フィルの正体がリオとトトにバレた次の日の朝食の時、ソールはそれとなく尋ねた。
「…？そうだけど、それがどうかしたの？」
フィルは首を傾げて聞き返す。
「大丈夫なのかい？セルペンテは、妖魔の中でも特に巨大で狂暴な奴らだ。子ならそれでもまだフィルの力で何とかなるけど、親は体長が十五メートルもあるんだ。今のフィルに、それが倒せるのかい？」
ソールは言った。
「無理だったら、放って置けっていうの？」
フィルは反発して言う。
「そうは言ってないよ。ただ、フィルは狼人間といってもまだ半人前だし、もしフィルに何かあったら、僕はお姉さんに申し訳が立たないんだ」
ソールの言う姉、とはフィルの母親・ネリルの事だ。
「でも、親を倒さなきゃ、また街が危険に曝される…叔父さんは、母さんがどうして死んだのか、忘れたの！？」
「そうじゃない！フィルは今混乱してるんだ。昨日、あんな事があったから。とにかく、まずは落ち着くんだ」
ソールも語気を強めて言う。その有無を言わせぬ口調に、フィルも取り敢えずは反論を止めた。
「フィル、僕の予想が正しいなら、君は、この街を去ろうとしているんだ。だから、その前にセルペンテを倒さなければいけないと焦ってる」
フィルが落ち着いたのを見てから、ソールは言った。神妙な面持

ちで聞いていたフィルは、図星らしく顔を俯けた。
「でも、状況はフィルが思っているほど酷くはないんだ。少し時間が要るかもしれないけど、リオちゃんもトトくんも、きっとフィルの事を受け入れてくれるはずだ。君は、二人を信じていないのか？」
「信じるとか信じないとか、そういう問題じゃない。ソール叔父さんだって知ってるじゃないか」
フィルは先ほどよりは語調を緩めつつも、言い返した。フィルはソールから歴史を学ぶにあたって、狼人間が辿ってきた過去についても読んでいる。人に正体を知られた狼人間が、どんな末路を辿ったか、それは言葉にすることも憚られるような、この国の黒歴史だ。それを知っている狼人間のフィルが神経質になるのも、致し方のないことだ。
「とにかく僕は今日、セルペンテの親を倒して、この街を出て行く。もうこれは、しょうがないことなんだ」
食事にまったく手を付けないまま食卓を立ち、顔を俯けてそう言うフィルの顔の表情は、この上なく悲痛だった。
フィルがダイニングルームを出て行くのを見届けると、ソールはフィルが出て行ったドアを見つめながら、一人考え込んでいた。

「どうだ、リオ。気持ちは決まったか？」
その日の昼頃、樫の木の下でリオと待ち合わせていたトトは、やってきたリオに聞いた。
「私、たぶん、決まったと思う。なんだか、まだはっきりとはしてないけど」
リオは自身なさ気に言った。
「ったく、らしくないな、リオ。もっといつも通りしゃきしゃきしろよ」
トトは不器用なりにリオを励まそうとして言った。
「そういうトトはどうなのよ？」

リオは言った。
「オレは…オレも、何となくかな」
トトはちょっと痛いところを突かれたように言った。
「ねえ、そういう事ならさ…一度、フィルに直接会ってみない？」
リオは控えめに提案する。
「…確かに、それが一番手っ取り早いかもな。でも、オレ達が行ったとしても、会ってくれるのかどうか」
一考してから、トトは言った。
「実は私、昨日一回行ってみたのよ。そしたら、やっぱり会ってくれなかったけど、ソールさんは、明日また来てくれたらフィルも落ち着いてるだろうって」
「なるほどな…じゃあ、そうするか。とにかく、なにもしないよりはマシだろう」
リオの言葉に、トトも頷いて言った。

二人はアグノスの教会に到着すると、四角い扉の横に据え付けられている呼び鈴を鳴らした。軽やかだがよく響く音が鳴り、程なくして扉が開かれ、ソールが顔を出した。
「ああ、二人とも、よく来てくれたね」
ソールは、ほほ笑んで出迎えたが、そのほほ笑みはどことなく無理に繕っているようにも見える。
「なんだか、疲れて見えるんですけど、大丈夫ですか」
リオが心配して尋ねると、ソールは困ったように頭の後ろを掻いた。
「いやあ、思ってたよりもフィルが強情でね…どうしてもこの街を出て行くって言って、僕の話を聞いてくれないんだよ」
「アグノスを出て行く？フィルは、そこまで深刻に？」
トトは驚いて聞き返した。
「そうなんだよ。本人にとっては、生き死にも関わり兼ねない問題だからね」

「そうなんですか…」
リオは自分の中にフィルへの同情が込み上げてくるのを感じた。やはり、狼人間であってもフィルはフィル。大切な友達なのだ。リオは自分の中で、それを再認識した。
「フィルに会わせてくれますか？」
リオと同じような気持ちを感じたのか、トトも深刻な顔になって聞く。
「うん、君達さえよければ、ぜひ会ってほしい。多分、フィルを引き止められるのは君達だけだからね」
ソールはどこか嬉しそうに承諾した。
「大丈夫、どんなに取り乱しても、ロウになって噛み付いてきたりはしないから」
「リオ、行こう」
トトはリオを振り返って、決然とした表情で言った。その男らしい振る舞いに、そんなこと考えるような状況じゃないと思いつつ、リオは心臓がきゅっと締め付けられるような感覚を抱いた。
「ええ、行きましょ」
トトに勇気付けられて、リオは迷う事なく言った。
二人が教会堂に入ると、さして広くはないが教会らしい玄関ホールがあった。その景色だけ見ていると、あまり人が住む場所には見えない。教会の建物のほとんどは当然、教会として使われているので、フィルやソールが普段暮らす場所はホールの左端の扉から真っすぐ続き教会の裏まで回るL字状のスペースだ。リオもトトもよく遊びに来るので、建物の構造はおおよそ分かっている。
二人は左端の扉から入り、真っ直ぐに行ったところにあるダイニングルームを抜け、その先にある階段を上って行った。その階段を上がったところにある二つの扉の先にあるのが、それぞれフィルとソールの寝室である。
リオはフィルの部屋の前に着くと、そのドアをノックした。しかし、返事はない。続けて名前を呼んでみるが、やはり返事はなかっ

た。
「やっぱり、会ってくれないのかしら…」
リオは意気消沈して言ったが、トトはそれでは引き下がらなかった。
「フィル、入るぞ」
それだけ言うと、トトは答えも聞かずに、ドアを開いた。リオも少し緊張しつつ、トトの肩越しに部屋を覗き込む。
「…あれっ？」
しかし、そこにフィルはいなかった。ただ、大きく開かれた窓の脇で、カーテンが風にはためいているだけだ。
「まさか、フィルったら逃げ出したの？」
リオはすぐに思い付いたことを口にした。ここは二階だが、ロウの力を使えば、二階の窓から地面まで、無傷で降り立つことも簡単だろう。
「ったく、あんのバカ…」
トトはため息混じりに言った。
「でも、逃げるったって、一体どこに行ったのかしら」
リオは顎の下に手をあてて考え込む。
「おい、リオ、これ見ろよ」
トトはフィルの部屋の机の上に広げられた紙を示して言った。リオが近づいてみると、それは地図だった。どうやら、闇の森一体を表した地形図のようだ。もともと記されている情報に加えて、フィルの多様な書き込みがゴチャゴチャと加えられているので、この地図を完全に解読できるのは、恐らくフィル本人だけだろう。
「これって…もしかして、フィル、闇の森に向かったっていうの？」
リオは緊張した声で言う。闇の森といえば、妖魔が住み着いているという噂が絶えない場所である。フィルのように妖魔に変身する力がある人間くらいでなければ、間違っても近づこうなどとは思わないような場所だ。
「でも、なんでこんな時に…」

「これは推測だが…フィルは、ここを出て行こうとしてるんだろう？ってことは、それまでに自分の使命を少しでも果たそうとしているんじゃないか？」
トトは言った。伊達にフィルの親友を長年続けている訳ではない。フィルがこういう時にどういう事を考えるのかは、容易に予想できる。
「使命…それって、街を守るために妖魔と戦うってこと？」
リオは信じられない思いで聞き返した。
「だとしたら、何か嫌な予感がする…せめてフィルが森のどこに行くつもりなのか分かれば…」
「それってもしかして、ここじゃない？」
リオは地図の南西の一点を指した。そこは木のない平地になっていて、赤いペンで丸く囲まれていた。
「だってほら、地図の上に赤いペンが乗っかってるじゃない。それでこの地図に赤いペンで書き込まれてるのはこの丸だけだから、この丸はついさっき書かれたって事でしょ？」
「本当だ。リオにしては頭がいいな」
トトは感心したように言った。
「『にしては』ってなによ、もう」
リオは口を尖らせて言う。
「…行くか？」
トトはリオを見つめて、聞いた。リオは緊張しつつも、ゆっくりと頷いた。

「どうだった？フィルは会ってくれたかい？」
二人が下の階に降りると、ダイニングルームで待っていたソールが声をかけてきた。
「いや、それが…」
トトはソールに嘘をつくことを心の中で詫びながら言った。だが、フィルが闇の森に向かい、自分とリオがその後を追おうとしている

などということがもしバレたら、絶対に引き止められてしまうだろう。
だが、なぜかトトは、自分達が行かなければならないということを直感的に悟っていた。
「声を掛けても、なかなか返事してくれなくて」
「そうか…本当に、どうしたらいいのかなあ、僕」
ソールは意気消沈して言った。
「だから、私たち、また後でもう一度来た方がいいかなって思うんです。いいですか？」
リオもどことなく申し訳なさそうな声音で言う。
「いやあ、それは本当に有り難いよ。フィルも、せっかくこんないい友達を持ってるのに、どうしてその友達を信じようとしないのかな」
ソールは悩み込むように言った。
「それじゃ、また後で来ますから」
トトがそう言って、二人は教会を後にした。

「…」
二人がダイニングルームを出て行くのを見届けると、ソールは席を立った。口には出さなかったが、ソールはリオやトトの表情や仕種に違和感を覚えていた。
微かに嫌な予感を感じながら、ソールは念のためフィルの部屋を尋ねて見ることにした。
二階に上がると、フィルの部屋の扉が、少し開いていることに気がついた。すぐに歩み寄って扉を開き、部屋の中を見ると、危惧していたとおり、フィルのいない部屋の光景が目に入ってきた。
そして机の上に広げられた、ソールがフィルにあげた闇の森の地図を見て、ソールはすべてを理解した。
「はあ…まったく」
ソールはため息をついて言った。

「誰も彼も、大人の言うことを聞いてくれないんだから」
そう一人ごちると、ソールはすぐにフィルの部屋を出て、自分の部屋へと向かう。
フィルもリオもトトも、大人として、また教会の使徒として、妖魔の危険に曝す訳には行かない。自分の部屋に入ったソールは、外出用の外套を羽織り、机に立て掛けてあった本人の身長ほどの長さのある杖を手にする。
「…間に合ってくれよ」
ソールは祈るようにそう呟くと、部屋を飛び出して行った。

―第六章・完―

第七章　闇の森

欝葱とした暗い森。動物の足音一つ聞こえない静寂の中で、ただ一つ、人間の少年の物と思われる足音だけが響き渡っていた。

フィルは木の幹に手をあてて、一旦立ち止まり、現在地を確認するために辺りを見回した。暗い緑色に包まれた陰鬱な森の光景を見ていると、淋しい気持ちが込み上げてきた。

今は闇の森とあだ名されるこの森だが、十年前、それまで滅びたと思われていた妖魔が復活するまでは、自然の響きに満ちた、明るい森だったのだ。それは、当時まだ幼かったフィルやトトを始め、アグノスの子供達にとっては格好の遊び場であった。

その思い出の地とも呼べる森が、今は悪しき妖魔の住家となり、十年前の面影すら感じられなくなっている。それを見て悲しくなるのは、ごく自然なことだ。

自分が予定通りの方向に向かっている事を確認しながら、フィルはソールの言葉を思い返していた。

―少し時間が要るかもしれないけど、リオちゃんもトトくんも、きっとフィルの事を受け入れてくれるはずだ―

本当にそうだろうか？リオやトトは、フィルが狼人間であることを受け入れてくれるだろうか？もし、そうなら…

…そんな事を考えても意味はない。フィルは、心の中に沸いて来る迷いを無理矢理頭の隅に追いやった。二人が受け入れてくれるにしろ、そうでないにしろ、それはフィルが決めることではない。今は、自分に出来ること―すなわち、セルペンテとの戦い―に専念するべきだ。

フィルは予定通りの場所にいることを確認してから、再び歩き出した。この雑木林一つを抜ければ、セルペンテの巣であるかもしれない空き地に着く。ここまで来たら、いつ不意打ちされても大丈夫なようにしておかなければならない。フィルは、不安を押し隠すか

のように、着ているマントの襟の辺りを握った。
雑木林を抜けると、地図に記されていた通りの、広い空き地があった。ほぼ全面を背の低い草に覆われているが、そこに一部分だけ、影になって暗くなっている場所があった。それが巨大な穴であることは、遠目でも間違いなく分かった。早速、当たりが来たのだ。
フィルが歩み寄ると、不意に穴の中から小さな音がした。その時、悍ましい殺気を感じたフィルは、すぐにそこから跳び退いた。
一瞬の後、さっきまでフィルが立っていた場所で、巨大な蛇が大きく開いた顎を、轟音とともに閉じていた。その衝撃だけで風が起こり、フィルは反射的に手で顔を覆った。もし咄嗟に避けなかったら、今頃フィルはすでに丸呑みにされていただろう。
獲物を捕らえ損なった巨大な蛇・セルペンテの親は、真っ赤な目をギョロッとフィルに向けた。その、子とは次元を異にする迫力に気圧されつつも、フィルはセルペンテを睨み返す。
セルペンテはフィルから一時も目を離さず、余裕たっぷりの動作で巣穴から這い出し、十五メートルもある長い胴体でフィルの周りを取り囲み、巨大な首をもたげて獲物を睨んだ。そして、まるでワインを品定めするソムリエでもあるかのように、緑色の舌でフィルの臭いを嗅ぐ。
果たして、フィルの臭いはセルペンテのお眼鏡に叶ったようだった。セルペンテは顎を大きく開くと、再びフィルを喰いにかかった。
フィルはその攻撃を、ギリギリの所で横っ跳びに躱すと、逆にセルペンテの目の上の膨らみの所の鱗の隙間に手をかけた。フィルの腕だけが狼に変化し、爪がセルペンテの頭に食い込む。
セルペンテはどうにかフィルを振りほどこうと、頭をブンブンと振り回したが、フィルは何とか掴まり続けていた。そしてセルペンテの頭が作り出す遠心力を利用して、セルペンテの真上に高く飛び上がった。
そこでフィルはマントを翻した。フィルの体が灰色のオーラに包まれ、それが巨大化した。そして、変身を終えた巨大狼・ロウが、

獲物を見失ったセルペンテの頭の真上に着地した。
　さしものセルペンテも、その不意打ちには対応出来なかったようだ。ロウの体重に負けて、巨大な頭が地面に強く打ち付けられる。セルペンテは声にならない怒りの叫び声を上げて、頭を力任せに振り上げた。そこで、ロウはセルペンテの頭から飛び降り体ごと振り返って、暴れる大蛇に向き合った。
　その時、のたうつセルペンテの巨大な尾が後ろから迫って来ていることに、ロウは気づけなかった。次の瞬間、ロウは体の横から想定外の衝撃を受けて吹っ飛ばされて、巨木の幹に叩きつけられた。痛みのあまり、思わず呻きが漏れる。
　ロウは痛みを堪え、何とか体勢を立て直した。ある程度落ち着きを取り戻したセルペンテは、ロウをじっくりと観察している。何度も攻撃を避けられ、しっぺ返しまで食らわされたので、今度は絶対に逃がすまいと慎重を期しているようだった。
　ロウは脚を踏ん張り、牙を剥き出しにしてセルペンテを威嚇した。そして口を開くと、力いっぱいに大きな声で吠える。周りの木の葉までざわめかせる凄まじい咆哮に、巨体のセルペンテもほんの少しながらたじろいだ。
　ロウはその隙をついて、セルペンテに向かって突進する。開かれた口の中の牙、灰色の脚の先の鋭い爪が美しく銀色に輝いている。
　怯みから立ち直ったセルペンテは、ロウを喰らおうと顎を開いて迎撃する。ロウは地面を蹴り、セルペンテの攻撃を避けるとともに、その頭上へと飛び上がった。そして自然落下の力でセルペンテに爪を食い込ませ、牙で噛み付いた。セルペンテが再び叫び、緑色の血がほとばしった。
　セルペンテはロウを投げ飛ばそうと、頭を大きく振った。先ほどのダメージのせいで、ロウは捕まりつづけることが出来ず、そのまま地面に叩きつけられる。セルペンテの巨体が生み出す力は想像を越えるものだった。ロウは口の中を切ったのか、口から血が滴たらせている。その時、ロウの体が灰色のオーラに包まれた。

そして、然る後その球状のオーラが弾けると、そこには人間の姿に戻ってしまったフィルが倒れていた。体力の過度の消耗のせいで、狼の姿ではいられなくなったのだ。

ついに獲物を仕留めたことを悟ったセルペンテは、舌を出し入れしながら悠然とフィルに近寄り、少年を丸呑みにしようと口を開いた。

「…フィル！フィル、大丈夫！？」

その時、意識も朦朧としたフィルの耳に、意外な声が聞こえた。続けて、誰かの手によって、別の誰かの背中に押し上げられるように感覚があった。

「おい、しっかりしろ、フィル！」

「…リオに…トト？」

フィルは口の中に鉄の味を感じながら、切れ切れに言った。

「どうして、ここに…？」

「話は後だ！それより今は、ここを離れるぞ！」

トトは急いだ声でそう言うと、フィルを背負ったまま走り出す。後ろの方から響く、セルペンテが追って来るザラザラという音を聞きながら、フィルは意識を失った。

「クソッ、こいつ、思ってたよりずっとヤベェ！」

気絶したフィルを背負って走りながら、トトは小さく悪態をついた。

フィルを助けるにあたって、妖魔と遭遇することは覚悟していたが、それにしてもまさか、あんな巨大で獰猛な怪物とは…目測でも、前にフィルが倒した蛇の三倍くらいの大きさがあるのだ。ただの人間の、それもフィルという荷物を背負ったトトと、いくら男並に元気があるとは言え普通の女の子であるリオが、果たしてこの化け物から無事に逃げ切れるのだろうか。

正直、勝算は限りなく低かった。

妖魔は日の光の下では生きられないと、昔誰かから聞いたような気がする。だとすれば昼間の今なら、この欝葱とした森から逃げ出しさえすれば、助かる可能性はある。
が、この状況で、それが出来るか。そこが問題だった。
そう考えながら走っている間にも、後ろから来る大蛇との距離は確実に狭まっている。もしこれほど木々が生い茂って、セルペンテの進路を阻んでいなかったなら、とっくに捕まっているだろう。もはや一刻の猶予もなかった。
「…こうなったら…」
このままでは逃げきれない。そう確信したトトはぐっと奥歯を噛み締めて、呟いた。そしてフィルを背負ったままリオに走り寄った。
「リオ、フィルを頼む！あいつはオレが引き付けておくから、お前ら二人だけ先に行ってろ！」
「え！？そんな、だって、トトはどうすんのよ！？」
切羽詰まった表情のリオは、信じられない様子で聞いた。
「森の地形を利用して、何とか逃げ切って見せる」
トトは即答した。迷っている時間はもう残されていないのだ。それに、トトの言葉はただのハッタリや気休めではない。昔ここをよく遊び場にしていたトトは、この森のあらゆる地形を体で覚えているのだ。
「それに、このまま全員やられるよりはマシだ！」
トトが有無を言わせぬ声音で言うと、リオは放心したような表情で半ば反射的に頷いた。
「…じゃ、またな！」
トトはそう言い残すと、足元に落ちていた木の枝を掴んで、走り出した。トトはその木の枝を大蛇の目に向かって投げ付けた。不意の攻撃に反応出来なかった大蛇の妖魔は目の痛みに喚き、トトの思惑通り標的をトトに定めた。
そうして大蛇を引き付けて走り去って行くトトを、リオは呆然と見ていた。

「…トト…」
リオはそう呟くと、恐怖に力が抜けた体を奮い立たせて、フィルを背負うとその場から出来るかぎりの速さで去って行った。

トトはいくつもの大木が生えた林の中を縫うように走って行った。この辺りは森の中でも特に大きい木々が密集している。ここなら、大蛇は自分の思い通りに動けないだろう。事実、トトと大蛇の間の距離は、徐々にではあるが広がっている。
このまま行けば、本当に三人全員が助かることもできるかもしれない。トトは内心そう思った。少なくとも、リオと一緒に逃げていた時よりは可能性は確実に高まっている。
しかし、その安心が油断を生んだ。たしかに、トトはこの森の地形を把握していた。しかしそれは、絶滅したと思われていた妖魔が復活して子供が闇の森に入れなくなった、十年前までの森の地形だ。当然、新たに成長した木の事は、インプットされていない。
振り返って妖魔との距離を確認しようとしたトトは、想定外の木の根の存在に気づけずに、その根に足を取られて転んでしまったのだ。
「いてて…」
トトはすぐに立ち上がったが、そのわずかな間に大蛇はスルスルと素早い動きでトトに迫って来ていた。ついに大蛇の攻撃範囲にトトが入ると、大蛇は大口を開けてトトに飛び掛かった。
トトは死を覚悟したが、恐れていたその瞬間は訪れなかった。
「何してるんだ、トト君！早く逃げるんだ！」
それはソールの声だった。見ると、自分を庇うように立つソールの手に握られた杖は白く発光していた。そして二人と大蛇の間には白い半透明の壁が現れて、大蛇の攻撃を跳ね返していた。
「僕にはこいつを倒すことは出来ないけど、しばらく抑えておくことはできる！僕の心配はしないで、トト君は先に行っててくれ！」

ソールは緊張の汗を浮かべながら言った。ソールの意志を汲み取ったトトは、何も言わずに走り去った。
トトがしばらく走っていると、やがて目の前に明るい光が見えてきた。暗い森の中に慣れた目には眩しすぎる光だったが、トトにとってその眩しさはまさに、あの恐ろしい大蛇から逃れる希望の光のようだった。
程なくしてトトは森を抜け、それまでの陰鬱な世界から一転、ソゲンの丘の、いつもの明るいのどかな昼下がりに飛び出した。そのあまりに強いコントラストに、トトは一瞬、それまでの事がすべて悪い夢だったんじゃないかと本気で思った。
とにかく闇の森から離れつつ辺りを見回すと、ちょうどフィルを重そうに背負ってヨロヨロと歩くリオの姿が目に入った。トトの方が足は速かったが、その分遠回りして出てきたので、結局はリオとほぼ同時に森から出ることになったのだ。
「おーい！リオ、大丈夫か！？」
トトが走り寄ると、どこかぼうっとしていたリオはゆっくりトトを振り返った。そしてトトの姿を見ると、リオは安心のあまり体から力が抜けたのかその場にストンと座り込んでしまった。その時フィルが落っこちそうになったので、トトは慌ててそれを受け止めると、フィルを草の上に寝かせた。
「…トト、よかった、無事だったのね」
リオはふいに、今まで忘れ去っていた言葉を思い出したかのように、言った。
「言ったろ、逃げ切って見せるって」
トトが強がって言うと、リオはどこかフィルに似た曖昧な笑みを浮かべた。
森の方に目をやると、無事に森を脱出して来たソールがこちらに向かってくるのが見えた。そして、一時天を覆っていた暗雲も綺麗に晴れた広い空に輝く太陽を見て、トトは改めて、自分達が生き残ったことを実感するのだった。

―第七章・完―

第八章　妖魔勉強会

「それで、三人とも、何か言うことはないの？」
「…ごめんなさい…」
場所はアグノス教会のダイニングルーム。まるでこれから、それでお仕置きをしようとでも言うかのように杖を持ったソールの前に、フィル・トト・リオの三人は神妙な顔で正座していた。
「ごめんなさいで済む話しじゃないよ！下手したら、三人とも死んでたかもしれないんだぞ」
ソールは真剣な声で言った。
「ったく、うるせぇな…」
「トト君、聞こえないように小さく言ってるつもりだろうけど、しっかり聞こえてるからね！」
悪態を呟いたトトを、ソールは厳しく叱責する。
「だいたい、二人とも、フィルが闇の森に行ったことに気がついたんなら、どうして僕に言ってくれなかったんだよ」
ソールはリオとトトを見て言う。
「それは…もしソールさんに言ったら、私たちに闇の森に行かせてくれないだろうと思って…」
「けど、フィルを引き止められるのはオレ達だけだって思ったから…」
「それにまさか、あんなに大きな妖魔に出くわすことになるなんて、思っても見なかったんです」
リオとトトは交互に弁明した。
「…まあ、フィルを思ってくれる二人の気持ちは嬉しいし、これ以上二人を責める訳にも行かないかなぁ」
二人の切実な声音に、元来人を叱る才能のないソールは、多少弱腰になる。
「でも、二人はともかくとしても…フィル！」

「は、はいっ！」
ソールが突然大きな声を出したので、フィルはビクッと反応した。
「まったくフィルには失望したよ。あれだけセルペンテの親には手を出すなって言ったのに…それに何より、こんな優しい友達を信頼しないだけじゃ飽き足らず、危険に巻き込むなんて！」
「はい…ごめんなさい…」
三人の中で群を抜いて打たれ弱いフィルは、言い訳も出来ずにただ謝罪するしかなかった。
「わかったら、もう二度とこんなことはないようにするんだよ」
ソールはそう言いながら、どうしても甘さが出てしまう自分に内心ため息をついていた。
「はい…」
フィルは目を伏せてどこか辛そうに言った。
「…フィル？どこか調子でも悪いのか？」
トトが気を使ってフィルに尋ねたちょうどその時、フィルは気を失ってその場に倒れてしまった。
「フィル、大丈夫！？」
リオはすぐにフィルに駆け寄り、その様子を見た。その額には、苦痛に堪えるかのように玉の汗が流れている。ふと、フィルの手が脇腹を押さえていることに気がつき、シャツをめくってその部分を確かめた。
「ひどい痣…きっと、あの妖魔にやられたんだわ」
リオは顔をしかめて言った。そこで二人も覗き込むと、フィルの脇腹には大きな痛々しい青痣ができていた。それは、普通に暮らしている人間なら一生見ることもないだろうというような痣だった。
「こんな傷を受けていて、よく今まで耐えてきたな」
トトも顔をしかめて言った。
「きっと、オレ達を心配させないように…」
「まったく、もう！この子ったら、とことんバカなんだから」
リオはため息と共に言った。

「ソールさん、トトと一緒にフィルを看ていてください！」
「分かった。でも、リオちゃんは？」
ソールが聞く。
「私、痣によく効く薬草を知ってるんです。今から、それを採ってきます」
リオはそう言い残すと、すぐにダイニングルームを出て行った。
「へえ、リオちゃん、薬草にも詳しいのか」
残されたソールが感心したように言った。
「ええ、あいつの採ってくる薬草は、魔法みたいによく効くんです」
トトは言った。
「オレも昔よく、喧嘩した後はあいつを頼ったもんですよ」
「喧嘩、か…そういえば昔はよく、フィルがいじめられてたのを守ってくれてたっけね」
ソールはしみじみと言った。
「本当に君達は、フィルにとっていい友達だよ」
「いや、そんな、大層なもんじゃ…」
トトは謙遜して言った。
「ただ、あいつって気弱でヘナヘナしてる癖に、なんでも一人でしょい込もうとするから、どうにもほっとけなくて」
「確かにね」
トトの正鵠を射た言い方に、ソールは笑いながら返した。

「あの、ソールさん」
それからフィルは二階の部屋のベッドまで運ばれ、リオの手当を受けた。そしてフィルが安らかな寝息を立てている横で、リオがソールに声をかけた。
「なんだい？」
ソールは気さくな声で聞いた。リオはトトにちらっと目配せしてから、口を開いた。

「私達に、妖魔とかの事をもっと教えてくれませんか？」
「今回勝手に闇の森に入ったことは反省してるけど、オレ達、これからも何かしらでフィルの役に立ちたいんです」
途中からはトトが言葉をついで言った。
「なるほどねぇ…」
ソールはちょっと迷ったように言葉を濁す。
「まあ、君達きっと、ダメだといっても聞かないだろうし、それに危なくない仕事なら、任せても問題ないかな…」
「危なくない仕事って、例えば？」
ソールの言葉を聞いて、リオが尋ねた。
「例えば、今日リオちゃんがしてくれたような、妖魔に襲われた人の手当とか、妖魔に関する情報収集とか、かな」
ソールは答えた。するとリオとトトはなるほどという風に頷いた。
「ただし、その為には妖魔やフェルネレル教団のことについて、いろいろ知って置いてもらわなくちゃならない。かなり勉強しなきゃいけないけど、大丈夫かい？」
「うっ…勉強は…ちょっと…」
その悍ましい言葉にたじろぐトトを、リオは肘で突いて黙らせた。
「私は大丈夫です！」
そしてリオは、威勢よく答える。
「もちろんトトも大丈夫、よね？」
とトトに意味ありげな目配せをする。
「お、オレも…大丈夫、です」
既に大丈夫じゃない声で、トトも言った。
「よかった。そういう事なら早速始めようか！」
トトのあからさまな不自然さに気づいていないのか、それとも意図的に無視しているのかは分からないが、ソールはテキパキと話を進めた。
「それじゃ、僕はちょっとやらなきゃならないことがあるから、先に二人とも一階に行ってて！このままここで喋ってたら、フィルの

体に障るだろうし」
ソールはそういうと、さっさと部屋を出て行った。残されたリオとトトは、ソールがあまりにも突然手際が良くなったので、キョトンとして顔を見合わせるのだった。

「まずは根本的な事だけど、君達は妖魔というものが一体何なのか、知っているかい？」
三人がダイニングルームに集合すると、ソールが口を開いた。テーブルには、ソールが書斎から持ち出してきた本が何冊も重ねられていて、早くもトトの顔色を悪くさせている。
「？…妖魔って、人間を喰らう邪悪な存在、ですよね？」
ソールの質問の真意が分からず戸惑いつつ、リオは言った。こんな事は誰でも知っているようなことだ。
「確かに、それも正しい。でも、突き詰めて言うと、事はもうちょっと複雑なんだ」
ソールは言った。
「妖魔という存在は、始めから悪だった訳じゃない。妖魔はもともと、精霊が闇に堕ちた存在なんだよ」
「精霊、ですか？」
リオが聞き返す。
「そう。普通は人の目には見えないところにいる、他の何よりも清らかな、魂だけの聖なる存在だ。でも、清らかということはそれだけ、闇にも染まりやすいということでもある」
ソールは説明する。
「その精霊が、例えば人間が持つ憎しみのような、邪悪なエネルギーに触れると、その魂も侵食され、汚れていき、しまいには妖魔という邪悪な存在に成り果てるんだ」
「なるほど、でも…その事に、一体どういう意味があるんですか？」
トトがもどかしげに言った。あからさまに、こんな地獄さっさと

終わらせてくれと主張している。
「うん、この事にはとても重要な意味がある。良い質問だね、トトくん」
ソールは淡々と答えた。
「こうして生まれてしまった妖魔は倒そうにも、もともと魂だけの存在だから、普通に動物を殺すように倒すことはできない。だから、妖魔を倒すためには、邪悪な部分を浄化して、もとの清らかな精霊に戻さなくちゃいけないんだ。それができるのが、君達も知っている祓魔師と呼ばれる特殊能力者たちだ」
「ちょっと待ってください。それじゃ、フィルはどうやって妖魔を浄化してるんですか？」
リオが口を挟む。
「ああ、フィルはね、生れつきそういう素質があったんだ。狼人間が浄化の力を持ってるなんて変だと思うかもしれないけど、狼人間は妖魔と人間が半分ずつの存在だから、その人間の部分に浄化の力があるのは、別段おかしい事ではないんだ」
ソールは言った。が、その声音にはどことなくはぐらかした感じがあった。
「それで、話を戻すけど、大事なのは祓魔師が妖魔を倒すとき、ただ倒すんじゃなくて、浄化しなければならないというところなんだ。妖魔というのは、必ず体のどこかに核を持っている。つまり、妖魔の素になり、今は闇に支配されてしまった精霊だ。もともと精霊は基本的に、球体の形で存在する。それがそのまま妖魔の中に埋め込まれているような状態だと思ってくれればいい。そして妖魔を浄化する時は、この核に浄化の力を注ぎ込まなきゃならない。ここまでは分かるね？」
ソールが聞くと、リオとトトは黙って頷いた。
「そういう訳で、妖魔を倒すときは、その妖魔の核がどこにあるかをいかに早く知るかがキーポイントなんだこれが分からない限り、妖魔は倒せない。二人、特にトトくんには、この核がある部位を分

析する仕事を手伝ってもらう事になると思う」
「ええ～…そんなつまらなさそうな仕事、したくねえよ～」
先ほどからの小難しい講義に対するストレスも相まってか、トトは不満げな声を上げた。すると、すかさずリオのハリセンが景気のよい音を立てた。
「いてっ、何すんだよ、リオ！」
「もう、つべこべ言わないの！フィルの役に立ちたいんでしょ！」
「分かってる、分かってるってば。そんなにカリカリする事ねえだろ」
「ま、まあまあ、二人とも、落ち着いて」
ちょっと焦った声でソールが止めに入る。と、その言い方や仕種があまりにもフィルにそっくりだったので、リオとトトはつい吹き出してしまった。
「二人とも、どうしたの？突然笑い出したりして」
事情が分からないソールは、ただ困惑するばかりである。
「い、いや…やっぱり、肉親なだけあって、フィルと似てるんですね」
リオは笑いを抑えつつ言った。
「ああ、そういうことか」
それを聞いて、ソールは納得したように言った。
「それなら、昔姉さんにもよく言われたもんだったよ。『実の親よりも叔父に似てるなんて』って」
「ソールさんの姉さんって、要するにフィルのお母さんでしたよね」
ふと気になって、トトが聞いた。
「うん、そうだよ。今はもういないけどね」
「たしか、十年前の『例の事件』で…」
リオは反射的に言い、不謹慎な事を言ってしまったと恥じるように口に手をあてた。
「気にしないで、リオちゃん。でも、妖魔がどれだけ危険かは『例の事件』からも分かるだろう？」

ソールは言った。
「だから二人も、これから妖魔と関わって行くことになっても、絶対に今日みたいな向こう見ずな事はしないこと。それだけは約束してほしい。いいかい？」
ソールの言葉に、リオとトトも自然と真面目な顔つきになって頷いた。
「よし！それじゃ、まずはこの本から読んでもらおうか！」
そう言ってソールは、いかにも古そうな分厚くて大きい本を二人の目の前に置いた。置いた時の衝撃でテーブルが軋む音が鳴り響いた。
「…こんな本読むくらいだったら、妖魔と戦う方がよっぽどマシだぜ…」
その本を一目見た瞬間、トトはついさっきの約束を早速揺るがし兼ねない言葉を口にするのだった。

―第八章・完―

第九章　祓魔師

フィルは目覚めると、自分が部屋のベッドに寝かされている事に気がついた。窓からは、赤っぽい夕陽が差し込んで来ている。一瞬、状況が掴めなかったが、体を起こそうとした時に脇腹に走った鈍い痛みを感じて、自分が倒れた時の事を思い出した。

「いたた…」

フィルは疼くような痛みを耐えながら、ベッドの上で身を起こした。セルペンテの尻尾によって付けられたその痣はまだかなり痛むが、痣は最初よりは随分と癒えているようだった。

その感覚を感じ取った時、フィルの中に昔のある記憶が蘇ってきた。

昔のフィルは、多分街一番のいじめられっ子だった。殊に当時、街の悪ガキのリーダーとして名を馳せていたフィルの三つ上の少年・ダルフ・カウサスとその取り巻きからは、事あるごとにいじめを受けていたものだった。

虐められていた理由は分からない。もしかしたら、街の子供達は本能的に、フィルの持つ人間ならざる部分をぼんやりと感じ取っていたのかもしれない。

ともかく、そんな街一番のいじめられっ子だったフィルを唯一守ってくれたのが、リオとトトだった。

トトはもちろん、リオも並の男の子を遥かに凌ぐ強さを持っていたから、ダルフでさえもこの二人には一目置いていた。だからこそ、フィルはこんな境遇の中でも、そこそこ安全な少年時代を送ることができたのだ。

今となっては懐かしい、そんな時代には幾度となく、フィルはいじめによって怪我をした。そんな時は、すぐさまリオがソゲンの丘のどこからか薬草を採ってきて、それでフィルの手当てをしてくれたものだった。その薬草によって傷が癒されるときの感覚は、ちょ

うど今の感覚にそっくりだった。
フィルがボーッとそんなことを考えていると、ふいにドアの開く音がした。
「おや、フィル、目が覚めたのかい？」
顔を出したのは、ソールだった。その手には湿布と薬草があった。
「叔父さん、その薬草…」
フィルはその見慣れた薬草を見て、聞いた。
「ああ、これね。リオちゃんがくれたんだ。打撲傷を治すにはこれが一番だって」
「やっぱり…」
そう言いながら、フィルは気持ちが軽くなるのを感じた。
「それより、フィル、調子はどうだい？」
「うん、おかげで随分良くなったよ」
フィルは微笑んで答えた。
「それで、リオは？もう、帰っちゃった？」
「まあ、帰るって言っても隣だけどね」
ソールはフィルの様子に安心したように言った。
「僕の言った通りだろう？リオちゃんもトトくんも、受け入れてくれるって」
ソールの言葉に、フィルはゆっくりと頷いた。
「でも、それはそれとして…セルペンテのことはこれから、どうするの？」
「まったく…こんな時くらい、自分の心配すれば良いのに。フィルは働きすぎだよ。狼人間と言ってもまだ子供なんだから、そんなに無理することないんだよ」
ソールは諭すように言った。
「気になるんだから、仕方ないじゃん。それより、どうするの？」
「あのセルペンテは、今の君の手には負えないよ。実はさっき、セルネルに伝書鳩を飛ばしたんだ。じきにあっちから祓魔師が来るから、セルペンテの親はその人達に任せることにする」

ソールは反論はさせないという様に強めに言った。もっとも、そんな事をしなくても、その恐ろしさを直に体験しているフィルは、もうあの大蛇に不用意に近づく気などなかったのだが。
セルネルとは、闇の森を挟んでアグノスの反対側にある街で、そこにはフェルネレル教団のアルセイル地方支部があるのだ。
「だから、フィルは今は怪我を治すことに専念するんだ。いいね？」
「分かってるよ」
フィルは夕陽を眺めながら、神妙に答えるのだった。

「ちょっとレーテさん！なんで荷物持ってるんですか！」
「うっせえな。何か悪いかよ」
そこは昼でも真っ暗な闇の森。妖魔の影響によって闇の力に支配された呪われた土地を、明らかに場違いなオーラを纏って歩く、二人の男女がいた。どちらも真っ黒なローブに身を包んで、フードを被っている。
「荷物持ちはサポーター、すなわち私の仕事です！人の仕事を横取りしないでください！」
不満げにそう言うのは、二人組の内の小さい方だ。そのフードの下から覗く顔は、金髪碧眼の美少女だ。
「あのなあエマ、お前が荷物をいかにも重そうに運んでるから、ちょっと気を使って手伝ってやったってだけで、どうしてそうブチブチ言われなきゃならないんだよ」
もう一人の、背の高い方が言い返す。こちらは、先ほどレーテと呼ばれた、若い大人の男だ。その顔が物憂げなのが、隣の頑固なサポーターのせいかどうかは定かではない。その手からは、この口喧嘩の元凶となっているバッグが提がっている。
「重かろうがなんだろうが、荷物持ちは私の仕事ですから！養成所でも、そう習いましたよ！」
エマと呼ばれたサポーターは、一歩も引こうとしない声音で食い

下がった。
「ルールが全てじゃないんだよ。何ごとも臨機応変にやって行けないと、祓魔師として独り立ちできないぞ」
「えっ、そうなんですか！？」
今までの調子から一転、意外とあっさりと受け入れるエマ。
「そうだよ。訓練と実戦は次元が違うんだ。あっちはルールなんか知ったこっちゃないのに、こっちだけが杓子定規に戦ってたら、あっという間に殺されるぜ」
「そうなんですか…勉強になります」
エマは素直にそう言うと、すぐさまペンとノートを懐から取り出し、レーテの言葉を一言一句漏らさずにメモする。
「…だから、そういうのを杓子定規って言うんだよ…」
レーテは半ば呆れたように言う。
「なるほど、勉強になります」
再びエマのペンがノートの上を走る。その様子を眺めながら、レーテは小さくため息をつくのだった。
「ところで、レーテさん。これから、アグノスの街に行くんですよね」
しばらくして、エマがふと聞いた。
「ああ、そうだ」
「レーテさんは、今までアグノスに行ったことはあるんですか？」
エマは尋ねた。二人が所属するフェルネレル教団支部があるセルネルとアグノスは、地理的には隣町ではあるのだが、十年前の妖魔の大量発生があって以来、二つの街の間は闇の森という名の壁に隔たれてしまっている。そのため、今ではアルセイル支部の半分の祓魔師でさえ、アグノスの街には行きたがらなくなってしまっているほどなのだ。当然、養成所を出てまだ間もなく、独り立ちすらできないエマは、今までアグノスには行ったことがなかった。
「まあな」
とレーテは答える。

「アグノスの街って、どんな所なんですか？」
エマは続けて尋ねる。
「何て言えば良いかな…まあ、のどかさと騒がしさを足して二で割ったみたいな街、ってところだな」
「？…それって、要するに普通って意味ですか？」
エマは可愛らしく小首を傾げる。
「いーや、文字通りの意味だよ」
ソールは気楽な声で言った。
「なるほど、勉強になりま…あっ」
その時、再びノートとペンを取り出したエマは、何かに気づいて足と手を止めた。そしてすかさず腰から提げた袋から、途中で二股に分かれた、長さ四十センチほどの真っ直ぐな金属の棒のような物を取り出す。
「聖音叉が、妖魔の波動に共振してます！」
その言葉を聞いて、レーテのお気楽そうな雰囲気が一変した。聖音叉は、妖魔が発する独特の波動に共振するようになっている。それが震えるのは、妖魔が近くにいる証拠なのだ。
「方向はどっちだ？」
レーテは素早く身構えながら、鋭い声でエマに聞く。
「九時の方向、距離は五十メートルほどです！」
それを聞いて、ソールはローブの中の、腰に装備されたホルスターに手を添えつつ、指示された方向に向き直った。
そして数秒、緊張した時間が過ぎ去った。その次の瞬間に、エマが指示した通りの方向から、ガサガサという音がした。と思う間もなく、その茂みから巨大な蛇が飛び出してきた。体長は五メートルほど、セルペンテの子に間違いない。
セルペンテはレーテとエマを丸呑みにしようと真っすぐ襲ってくる。二人は横に避けてその攻撃を躱した。
「エマ、『金縛り』を頼む！」
レーテは隣のエマにそう言いつつ、自分は熟練さを感じさせる素

早い動きで銀色に輝く銃を取り出した。
　セルペンテが振り返ってくると、レーテは引き金を引いた。弾丸はセルペンテの胴体をかすり、その鱗を砕いて肉を傷つけた。セルペンテの巨体からすれば対した傷ではないが、それでもその大蛇を怒らせるには十分だった。
　セルペンテはレーテを睨み、ガバッと口を開いた。シャーシャーという、歯の隙間から空気を押し出す時のような音を立てながら、セルペンテはレーテに噛み付こうと首を延ばしてきた。隣でエマが体を強張らせるのが感じ取れる。
　しかしレーテは落ち着き払って、銃口をセルペンテの真っ赤に輝く目に向けた。そして、セルペンテの牙がレーテに突き刺さる直前に、引き金を引く。
　銃弾は過たずセルペンテの目を射抜き、セルペンテはその痛みに絶叫し、のたうちまわった。
「エマ、今だ！」
「はい！」
　油断なく銃をセルペンテに向けているレーテの横で、エマは腰の袋からもう一つの聖音叉を取り出し、二つの音叉をぶつけ合った。音叉は小刻みに振動したが、二人には音は聞こえなかった。しかしセルペンテだけは別だった。その、人間には聞こえない超音波を耳にした瞬間、それまで悶えていたセルペンテは硬直し、動かなくなった。
「よし。それじゃあ、次は『共鳴』だ」
　レーテの指示にエマはすぐ反応し、右手に持った一本目の聖音叉を近くの木に打ち付けた。音叉は、今度は人間の耳にも聞こえる澄んだ純音を放った。すると、それに反応するかのように別の音がセルペンテの体から響いてきた。エマは、目を閉じ、沈黙してその音を聞いた。そして、知りたい情報が分かると、瞼を開けた。
「…首の付け根から百二十センチの腹部です」
　それを聞いたレーテは、硬直したセルペンテの、エマに示された

部分に銃の照準を合わせた。
「苦しかっただろう。今、解放してやる」
レーテは厳かな声でそういうと、銃の引き金を引いた。レーテの能力によって浄化の力を宿した銀の弾丸が、エマが探し出したセルペンテの核を正確に射抜いた。
すると、セルペンテの巨体はボロボロと崩れ落ち闇に溶けて消えて行った。そして、最後には真っ白に輝く球体だけが残った。球体は少しの間その場所に浮いて、留まっていたが、ふいにどこかへと飛び去って行き、あっという間に見えなくなった。
それを見届けると、エマはほっと安堵のため息をついた。
「緊張したか？初めての実戦は」
レーテは、さっきまでの鋭さはどこへやら、元通りの気さくな声で聞いた。
「はい…やっぱり、レーテさんの言う通り、訓練と実戦は次元が違いました…」
エマは気疲れした声で答える。
「それにしても、初めての実戦でよくあれほど冷静に戦えたな。感心したよ」
レーテはエマの頭に手を置いて言った。
「お前ならきっと、いい祓魔師になれるぞ」
「そんな、照れちゃうじゃないですか」
エマは顔を赤らめて言った。
「ま、どっちにしても先の話だ。取りあえず今は、アグノスに向かおうぜ」
「はい！」
レーテの言葉に自信を得たエマは、元気な声で答えると、レーテに続いて再びアグノスへと歩を進めて行った。

―第九章・完―

第十章　揺れる片想い

心地のよい穏やかな昼下がり、小柄で大きな四角いメガネを掛けた茶髪の、いかにも気弱そうな少女・ニーナは、今日はいつも篭る書庫ではなく図書館に備え付けてある机に座って、片手に小さめの小説の本を持ち、もう片方の手で頬杖をついて、ボーッとしていた。

本の頁は先ほどから一頁もめくっていない。なぜだか今日は、大好きなはずの本を読む気になれなかった。昔からたまにこういう事が起こるのだが、最近は特にその頻度が増えていた。ただボーッとして、そしてどういう訳か、時々深いため息が漏れるのだ。

「フィルさん、その本…」

ニーナはちょうど近くを通り掛かったフィルに声をかけた。フィルは『紫の姫と銀の騎士』という有名な時代モノの恋愛小説を小脇に抱えていた。

「この本がどうかしたの？」

フィルは振り返って聞いてきた。

「あ、いや…恋愛小説も読むんですね。ちょっと意外だなぁ、って思って」

ニーナは相手が気を悪くしないかと心配しながら、控えめに聞いた。

「え？ああ…嫌だなあ、僕ってそういう風に見える？」

フィルは苦笑して聞いた。

「そ、そういう訳じゃないんですけど…いつもフィルさんと会うのは、書庫の中だから」

ニーナはちょっと赤くなって言った。そして突然、何故自分は赤くなっているんだろうと自問する。しかし、その返答はなかった。

「それを言うなら、僕だって同じだよ。僕も、ニーナは書物ばっか

り読んでるもんだと思ってたよ」
「あはは…そうですよね」
ニーナは心ここにあらずのままで、頭の後ろを掻きながら言った。
「でもね…」
その時、フィルが言った。
「最近は、どんな恋愛小説も、読んでて面白くないんだよ」
「え？どうして、ですか？」
ニーナは首を傾げて尋ねる。
「だって、どんな小説のヒロインよりも……僕にとっては、ニーナの方がずっと魅力的だからだよ」
フィルののあまりに唐突な発言に、ニーナは一気に顔が火照るのを感じた。
「そ、そそそ…それって、もしかして…」
ニーナが慌てるのも構わずフィルはその茶色い瞳を真っ直ぐ覗き込んできだ。ニーナは、自分を見つめてくるその灰色の瞳の中に、押さえ込まれた情熱を見た気がして、一気に胸の動悸が激しくなった。
「本当は、ずっと言いたかったんだけど、僕は…」
そこでフィルは、ついに決意を固めたかのようにはっきりと言った。ニーナはまさかと思いつつ、自分の心臓がバクバクいう音を聞きながら、フィルの次の言葉を待った。
「僕は、実は、ニーナのことが――」

「――ナ、ニーナ、大丈夫！？」
フィルの呼ぶ声に、ニーナははっと、妄想という名の白昼夢から眼を覚ました。場所は変わらず図書館の机、隣にはフィルが立っている。ただ、その眼にはあの情熱の色はなかった。そこにいるのはあくまで、いつも通りのフィルだ。
「どうしたの？さっきからずっと、ボーッとしてたみたいだけど」

フィルが心配そうに言うその言葉を聞いて、ニーナはやっと状況を理解した。
「あわわ…ふぃ、フィルさん、ごめんなさい！！」
そんなニーナの口から咄嗟に出たのは、謝罪の言葉だった。
「え？なんで謝るの？」
「あ、いや、それは…」
ニーナはかあっと顔を真っ赤にして言葉を濁した。そして、フィルの質問に答える代わりに、一番大事な事を尋ねる。
「あの…わたし、ボーッとしてる間に、何か変なこと言ってませんでしたよね？」
何も言ってなかった。どうかそう言ってくださいと、ニーナは一心に祈った。
「いいや、何も言ってなかったよ？それより、本当に大丈夫なの？顔も真っ赤だし、熱でもあるんじゃない？」
しかしフィルには、ニーナの中で激しく揺れ動く乙女心など分かるはずもない。フィルはただ、純粋にニーナの事を心配しているだけなのだ。
「あ、いえ、わたしは、だ、大丈夫、です…」
その口調がすでに大丈夫ではなかった。
「そ、それより、驚きました。フィルさん、今日は来ないとばかり思ってたから…」
とにかく話題を変えてごまかそうと、咄嗟にニーナは言った。
「？…どうして、今日は来ないと思ってたの？」
そして、ミスを重ねる。
まさか、ロウが目撃された次の日に限ってフィルが図書館に来るという法則性を発見して、ひそかに毎回待ち構えていたなどと白状できるはずもない。
「ぐすん…すいません、もう、勘弁してください…」
困りに困って、しまいには、涙目になってしまった。
「ちょ、どうしたの、ニーナ！？僕、何か悪いこと言ったかな」

フィルからして見れば、ボーッとしていた友達を心配して声をかけたら、訳の分からないことをひとしきり言った揚句に泣きそうになり出した、という状態である。動揺するのも無理はない。
「いえ、そうじゃないんです…ホントに、全部わたしが悪いんです…」
ニーナは俯いて辛そうに言った。さっきまでただ図書館でボーッとしてただけなのに、どうしてこんな事になってしまったのだろう。
「それより、フィルさんはどうしてここにいらしたんですか？」
それでも最後の一踏ん張りで、なんとかまともな話題転換に成功する。
「え、僕？別に、大した理由はないんだけど…」
フィルも、ニーナがこれ以上さっきの話題に立ち入って欲しくないらしいのを感じ取ってくれたのか、苦笑しつつもその話題に乗ってくれた。
「実はこの前、ちょっとした理由で脇腹を強く打っちゃって、それからずっと寝たきりで過ごしてたんだ。それで、運動不足になっちゃって散歩してたら、ちょうどこの辺りを通り掛かったもんだから、何となくニーナに会いたくなって」
先ほどの白昼夢の余韻のせいか、フィルが何気なく口にしたその言葉までもが、ニーナの胸をドキッとさせた。
「…わ、わたしに、会いたくなった、ですか？」
「うん。あ、でも誤解しないで。ホントに、何となくだから」
フィルの言葉に、破裂せんばかりに膨らんでいたニーナの心は一気にショボーンと萎んでしまった。
「あはは…やっぱり、そう、ですよね」
「？…どうしたの、ニーナ？」
フィルはまたニーナが変になるのではないかと心配したように尋ねた。
「いえ、何でも、ないんです。ところでフィルさん」
ニーナは何とか笑顔を取り繕って言った。が、その心は萎み切っ

たまま。
「なに？」
フィルはまだ視線のどこかでニーナを気遣いながら、聞いた。その視線がまた、今のニーナには恥ずかしかった。さっきまでは、もうこれ以上顔が赤くなることはないだろうとばかり思っていたが、それはとんだ見込み違いだった。
「フィルさんって、普段はどんな本を読まれるんですか？」
「普段ってことは、妖魔の資料集以外にって事だよね」
念のため聞いてきたフィルの言葉に、ニーナは頷いた。
「そうだなあ…僕は結構、満遍なくいろいろと読むんだけど…最近は、主に恋愛モノかな。特に今は『紫の姫と銀の騎士』とか」
「…え？」
予想外の返答に、ニーナは一瞬反応できなかった。まさかとは思ったが、奇跡としか思えないようなデジャヴュが、そこにあった。
「やっぱり、僕の雰囲気に合わないかな？」
フィルはニーナの本心など露知らず、苦笑して聞いてきた。
「あ、いいえ、そんな事ないですよ！」
ニーナは慌てて言った。
「そう？そう言ってもらえると、嬉しいけど」
「そ、それで、どうですか？『紫の姫と銀の騎士』、面白いですか？」
ニーナは内心フィルの次の言葉を期待しながら聞いた。
「うん、面白いよ。ニーナも一度読んでみたら？」
あっさりと答えるフィル。
「あ、そ、そうですか？フィルさんがそう言うんだったら、わたしも今度、試しに読んでみようかなぁ…」
ニーナは無理に微笑みを取り繕って言った。
「うん、この本は本当にオススメだよ。僕はね、この本の主人公が大切な人をどこまでも守り抜こうとした、その姿勢にすごく憧れたんだ。内容に関わるから、詳しくは言えないけど、いつか、僕にも

大切な人ができた時、こんな風に守れたら…なんて…ごめん、すごくクサい話になっちゃったな」
　最後は照れたように話を切ってしまったが、フィルがその話をしている間、ニーナは気づかない内にじっとフィルに魅入ってしまっていた。しかし、フィルが自分を見てくると、恥ずかしくなってすぐに視線を逸らしてしまう。ニーナは未だに、自分のこの感情を理解できないでいた。
「さて、それじゃあ、僕はそろそろ行こうかな」
　フィルは折を見たように言った。
「いつまでもニーナの読書を邪魔しちゃっても悪いし」
「そ、そんな、わたしなら大丈夫ですよっ。どっちにしろ、さっきだってずっとボーッとしてただけですし…」
　ニーナは反射的に言った。正直、自分の中の一部は、一度一人になって気持ちの整理をつけたいと抗議していたが、別の一面がフィルと離れることを拒絶していた。
「でも、なんだか今日のニーナ、調子悪いみたいだし、一人でゆっくりした方が良いんじゃない？」
「そうですね…」
　温かな親切心の篭ったフィルの言葉に、ニーナはどういう訳か、ふいに平常心を取り戻す。
「フィルさんがそう言うんだったら、そうします」
「じゃあ、お大事にね」
　フィルはそう言うと、本棚の間を通って、図書館の出口のある方に歩いて行った。
　一人残されたニーナは無意識のうちに深くため息をつくのだった。心臓はまだバクバク言ってるし、顔はまだ真っ赤になってるのが分かる。
（…それにしてもわたし、どうしちゃったんだろ…）
　そしてニーナは両手を胸にあてて、心の中でそう呟くのだった。

「…レーテさん、レーテさん！」
フィルとニーナが分かれたちょうどその頃、真っ黒なローブに身を包んだ二人組が、ソゲンの丘を横断していた。行く手には、まだ小さくではあるが、青い屋根の白い建物、アグノスの教会が見えていた。
「どうしたんだ、エマ？」
長身の男・レーテが金髪碧眼の少女・エマに聞いた。エマはといえば、全長四十センチはあるかという巨大な音叉を耳に近づけて、聴覚を研ぎ澄ましている。
「微かですが、聖音叉が共鳴してます」
エマは神経を張り詰めた声で言った。
「妖魔が出たのか？」
「それが、妙なんです」
エマは言った。レーテが物問いたげに視線を向けると、慎重に言葉を選んで、エマは再び口を開いた。
「一つは、妖魔の気配がすごく小さいのと、もう一つは、音源がアグノスの街の中にあるんです」
「街の中から？でも、あそこは教会の結界の中だろう？」
レーテは口では懐疑的に聞きかえしたが、心中ではその事にはそれほど驚いていなかった。今の時代は、昔に比べて教会の結界の力は弱まっている。実を言うと、今となっては教会が作る結界の効力は信用できる物ではなかった。
「とにかく、音が小さい上に、なんだかよく分からないんです」
エマはどこか少し焦ったように言った。
「よく分からない？何が、よく分からないんだ？」
「というのも、この音源が本当に妖魔なのか、自信がないんです。妖魔のようでもあるし、妖魔でないようでもある…」
エマは落ち着かない様子だった。
「なるほどな…それは確かによく分からないな…」

レーテも考え込むように言った。
「…この事は、後で詳しく調べてみよう。とにかく今は、教会に急ぐべきだ。そこで何か分かるかもしれないしな」
「そうですね…」
「どうした、落ち着かないか？」
すっかり元気をなくしたエマの声に気を遣って、レーテが尋ねる。
「はあ…聖音叉を使って来て、今までこんな事はなかったので…ちょっと落ち着かないです」
「ふぅん、やっぱりまだ半人前だな」
レーテはちょっとからかうように言った。
「なっ、どうもすみませんでしたね、半人前で！」
「そうそう、やっぱりお前はそうやって口うるさくしてる方が、ずっと似合うぜ」
レーテのその言葉でエマは、自分がレーテの策に嵌まってしまったことを知って恥ずかしくなり、しかしちょっとだけ嬉しくなった。だが…
「レーテさん…だ・れ・が・口うるさい、ですって！？」
そそくさと足を速めて逃げようとするレーテを、エマはちょっと遅れて後から追い掛けるのだった。

―第十章・完―

第十一章　ロウとレーテ

「ねえ、ソールさん、一つ聞いて良いですか？」
リオが言った。今、リオとトトの二人は、再びアグノスの教会に来ていた。
「なんだい、リオちゃん？」
ソールは快く先を促す。
「どうしてフィルは、妖魔と戦わなくちゃいけないんですか？街は、この教会が作る結界のお陰で、妖魔の侵入から護られているから安全なんじゃないんですか？」
これは、リオが前から気になっていたことだった。
「ああ、その事か。なかなか良い質問だね」
ソールあなるほどというように言った。そしておもむろに立ち上がると、説明を始めた。
「確かに君達も知っているように、ここアグノス一帯は、この教会が発生させる一種のバリアによって妖魔から護られている。でも、そのバリアが一体何で出来ているのか、という所まで考えた事はあるかい？」
リオは素直に首を横に振った。その隣では立てた本を盾にしてトトが盛大にイビキをかいている。そこでリオは、机の下でトトの足を思い切り踏み付けてやった。
「のわっ！…あ、いや、起きてました！さっきからずっと！」
「…トト、あんた…どんだけ白々しいのよ！」
あからさまにその場しのぎの言い訳をするトトの頭を、リオがハリセンで叩く。
「いてっ…いってぇな、リオ！何すんだよ！」
そして何故か逆ギレするトト。
「せっかく気持ち良く寝てたのに、お前のせいで台なしじゃねえか！このばかリオ！」

「ばかリオってなによ、ばかリオって！そんなに私に叩いて欲しいんだったら、いくらでも叩いてあげるわよ！？」
「うわっ、ちょっ、あぶなっ！分かった分かった、オレが悪かったって！」
ハリセンが耳のそばをかすった時の風を切る轟音を聞いて、トトは早くも負けを認める。
「そう思うんだったら、さっきの言葉撤回しなさいよ！」
「それは嫌だ！ホントの事言って何が悪い！」
ここでトトの（無駄な）プライドが最後の一踏ん張りを見せたせいで、トトは無事にハリセンの刑に処せられることとなった。
「ちょっと、二人ともストーップ！！」
リオが俯せになったトトに馬乗りになり、殺気立ってハリセンを構えたところに、やっとソールの仲裁が入った。多分、この二人の喧嘩を止めることが出来るのは、フィルとソールだけだろう。
「二人とも、仲が良いのはよおく分かったから、今日はそこまで！」
「「誰がこんな奴と！！」」
リオとトトは同時に吠える。
「ほら、言ってる側から息ピッタリじゃない。さ、夫婦喧嘩はそこまでにして、とにかく落ち着いて席に戻って！」
ソールはこれで御開きと言うように手を叩いた。リオとトトは一瞬、何の違和感もなく席に戻りかけたが、途中で気付いた。
「「夫婦じゃないし！！」」
「ほら、やっぱり息ピッタリ！」
ソールは何故か嬉しそうに言った。二人はムスッとしたが、さすがにそれ以上事を荒げることはしなかった。
「それはそうと、話を元に戻そう。教会が作る結界の話だったね」
ソールは折を見て話し出した。
「そうなのか…？オレはてっきり、フェルネレル教団の歴史の話だと…」
「その話なら、一時間くらい前に終わってるわよ」

キョトンとした表情でリオに呟くトトに、リオは怒りをむりやり抑え込んだような刺すような声で囁き返した。その冷めた眼差しは、『あんたもしかして、その時からずっと寝てたの？』と言わんばかりである。

「それで、教会の作る結界が何で出来ているかなんだけど…これは本当は、部外者には教えちゃいけないことになってるんだけど、君達二人なら信用できるから、二人が他の人に言わないって約束するんだったら、教えてあげてもいいよ」

ソールはにわかにどこか真剣みのまじった声で言った。

「どうして？なんで、部外者には教えちゃいけないんですか？」

リオが尋ねる。

「それは、話を聞けば分かると思うよ」

ソールの言葉に、リオとトトは顔を見合わせて、そして頷いた。

「教えてください、ソールさん」

リオが二人を代表して言った。

「分かった。まあ、分かってしまえば簡単な事なんだ。まず一つ、大事なのは、ここや他の場所にある教会そのものには、実は何の力も無いんだ」

ソールのその言葉は、二人にとってはかなり意外な物だった。では、一体何が結界を作っているのだろうか。

「結界を形作るもの、それは…教会に来る人々が持つ、信仰心なんだ」

ソールは静かに言った。

「妖魔が何よりも恐れ、嫌うのは人間の心が持つ、純粋な部分なんだ。それは例えば、愛情であったり、友情であったり、思いやりであったり…その中の一つが、神を畏れ、敬う信仰心なんだ。人々が教会に来て、信仰心を持つことで、それ自体が妖魔をはねつける結界となるんだ。これを部外者に教えちゃいけない理由、分かるかな？」

そう聞かれて、リオとトトは首を横に振った。

「この事を知ったら、人々は神を敬う心を持たず、ただ恐ろしい妖魔から守ってもらうためだけに教会に来るようになってしまう。そうなってしまったら、純粋な信仰心は消えて、結局、結界はその効力を失ってしまう事になるんだ」

ソールが珍しくも真剣に話す話を聞いて、リオは実際にそうなる状態を想像してみた。確かにこの事を人々が知ったら、恐ろしい妖魔を遠ざけたい一心で信仰心のかけらも持たずに教会に殺到することとなってしまうだろう。

「さてと、かなり遠回りしたけど、これでやっとリオちゃんの質問にちゃんと答えられるね。なぜ、フィルが妖魔と戦わなくちゃいけないのか。実を言うと、今の時代は今までになく、人々の信仰心が弱まっているんだ。だから必然的に、結界の効力も弱まっている。もし、フィルがああして食い止めていなければ、今頃この街はとっくに妖魔に蹂躙されていてもおかしくないんだよ」

フィルは今までずっと、そんなに重いものを背負っていたのか。助けている人達に知られる事もなく、逆に恐ろしい妖魔と罵られながら、それでも街を護るために戦ってきたのだ。

「ねえ、トト…」

リオはなんだか心細くなって、隣にいるトトを見遣った。

トトは安らかに寝息を立てていた。

「……」

そこでリオは、無言でハリセンを掲げた。周りに立ち込める殺気のせいか、そのハリセンは処刑用の鎌か何かのように見えた。

数秒後、今日も平和なアグノスの教会に恐怖の叫びがこだまするのだった。

その頃フィルは、ソゲンの丘を、アグノスの教会に向かって上っ

ていた。どこか遠くで耳慣れた悲鳴が聞こえた気がしたが、たぶん気のせい…だと思う。
フィルは、普段の服の上から例の灰色のマントを纏っていた。言うまでもなく、狼に変身するためのマントである。今までは、闇の森に行くときだけ着ていたのだが、今は状況が変わった。
この前セルペンテは、黒雲によってアグノスを覆うことができた。それは今まで以上に結界の力が弱まり、妖魔の力が増大して来ていることを意味していた。
その上今、セルペンテは野放しの状態にある。いつ、街を襲い出してもおかしくはないのだ。
そんな訳で、フィルは今、いつ妖魔が現れてもいいようにとマントを羽織っているのだ。
しばらく歩いていると、左手から二人の人影が歩いて来ているのが見えた。方向からして、教会に向かっているらしい。二人とも真っ黒なローブに身を包んでいる。
本物は初めて見るが、この服装は祓魔師の物だとすぐに分かった。自分の正体がばれなければいいが、とフィルは願った。実のところ、祓魔師の霊感の強さはフィルにとっては未知数なのだ。
その時、二人の祓魔師がフィルの存在に気付いた。フィルの方を振り返りはしなかったが、つと立ち止まり、二人で短く言葉を交わしたようだ。

フィルがマントを翻すのと、祓魔師の長身の方が銃の引き金を引くのは全く同時だった。
銃身から放たれた銀の弾丸は、フィルを包む灰色のオーラによって弾かれる。そしてそのオーラが消えると、巨大な狼・ロウが祓魔師達を睨んで立っていた。
「エマ、金縛りを頼む！」
銃を持った長身の祓魔師がそう言うと、もう一人の祓魔師が、本人の前腕よりちょっと長いくらいの音叉を二本取り出す。昔本で見

たことがある、聖音叉という対妖魔用の武器だ。
祓魔師は二本の聖音叉を打ち鳴らした。フィルの耳にキーンと耳鳴りのような高音が響いた。その音が妖魔の脳を害す物だと、フィルはすぐに悟った。実際、そう考えている間にも既に、頭が働かなくなってきているのが分かる。
フィルは口を大きく開き、咆哮した。周囲の草をそよがせるほどの轟音が、音叉の発する音を掻き消した。二人の祓魔師は怯んだが、すかさず一人が銃を撃ってきた。
銃弾の動きは、人間にとっては目に留まらないほどでも、狼人間の驚異的な動体視力のお陰で、今のフィルにははっきりとその動きを見ることができた。
フィルは純銀の弾を、体を回転させることで躱した。そして、一跳びで祓魔師との距離を詰めた。
背の低い方の祓魔師は、驚きで腰を抜かしてその場に尻餅をついたが、もう一人の方は怯む事なく銀色に光る銃の銃口をフィルの目に突き付けた。
「エマ、下がってろ。コイツは只者じゃない」
背の高い祓魔師は言った。フードの下から覗くのは、大人の男の鋭い眼だった。
「それにどうも、まともな妖魔でもないな。お前、一体何者だ？」
その言葉に、フィルは唸り声で返した。それを見ると、祓魔師は小さく笑った。
「ふん、まあいいだろう。倒して捕まえれば分かることだ！」
祓魔師が引き金を引く瞬間を見計らって、フィルは変身の一部を解除した。一瞬灰色のオーラに包まれた後、現れたのは人間の体に狼の首と手足を持った奇怪な怪物だった。
フィルは狼の脚で地面を蹴り、距離を取りつつ祓魔師が撃った二弾目を避けた。
その時、背の低い方の祓魔師が回り込んで来て、フィルの後ろを取った。

「よせ、エマ！死ぬぞ！」
背の高い方が警告を発する。その判断はフィルから見ても正しかった。聖音叉をしっかりと構えてはいるが、もしフィルがその気になれば、その首を掻き切るだけの隙はいくらでもあった。
しかしもちろん、フィルはそんなことをするつもりはない。フィルは狼の腕（前脚）で祓魔師を優しく突き飛ばした。その感触で初めて、それが女性—それも年端も行かない少女だということに気がついた。全身黒いローブで、フードも目深に被っているから、見た目からは分からなかったのだ。
少女は小さな悲鳴を上げて地面に倒れ込んだ。手を主人の手を離れた聖音叉は草の上に転げ落ちた。
「エマ、大丈夫か！」
幸い、長身の祓魔師の注意は、倒れた仲間に注がれていた。彼のいるところからここまでは距離があり、フィルがどう攻撃したのかも見えなかったので、彼からすれば仲間の少女の安否が気掛かりで仕方がないのだろう。
フィルは始めから、この場から逃げることだけを考えていたのだが、長身の祓魔師は相当な手練のようで、なかなか隙を見つけられなかったのだ。
長身の祓魔師はこちらに向かって走って来ている。程なく、仲間の無事を知るだろう。その前にこの場を去らなければならない。フィルは再びマントを翻し、ロウに変身した。
長身の祓魔師はロウの動きに感づき、銃を一発撃ってきたが、心が動揺しているのかその弾はロウを大きく外していた。フィルはそのまま全速力で、教会でも街でもなく、闇の森へと走り去って行った。

「おい、エマ、大丈夫か！？」
こちらへ向かってくるレーテの取り乱した声を聞いて、エマはお

もむろに身を起こした。一瞬、状況が掴めずキョトンとしたが、レーテが銃を剥き出しにしているのを見てはっきりと思い出した。
「レーテさん！私なら大丈夫です！」
エマはレーテに向かって言った。本当に、大丈夫過ぎるほどに大丈夫だった。あの狼の妖魔に襲われた時はさすがに死を覚悟したが、どういう訳かエマは怪我一つしていなかった。
「本当に大丈夫なのか？怪我してないか？」
レーテはやっとエマのいる場所にたどり着いて言った。
「怪我も何も、どうも私、軽く突き飛ばされただけみたいなんです」
エマの言葉に、レーテは一気に拍子抜けした顔になった。
「なあんだ、心配して損したぜ。そんな事ならお前なんか放っといて妖魔の方を追い掛ければよかったぜ」
「それにしても、どうしてなんでしょうか」
エマは言った。
「きっとお前なんか、殺す価値もないと思ったんだろ」
「ちょっと、いくらレーテさんでも、それは酷いですよ！」
エマはプンプン怒って言った。
「冗談だ冗談。そうカッカすんなって。それにしても、確かに変な奴だったなあ。オレ達を攻撃する意志もなかったみたいだし、アイツ、ホントに妖魔だったのか？」
「とにかく、まずは教会に行きましょうよ」
エマは言った。
「ああ、そうだな…」
レーテは、狼の妖魔が去って行った方を見つめながら、心ここにあらずと言った声で答えるのだった。

―第十一章・完―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7291y/

フェトレアス物語～狼－Low－～

2012年1月10日22時47分発行